

《論 説》

属州パンノニアの河川輸送

— セウェルス朝期のサヴァ川・ドラヴァ川流域における経済活動の持続と変化 —

野 崎 由利子

【要旨】

ローマ帝政期の属州研究で従来、考察があまりなされて来なかった先住者固有の文化や伝統が、ローマの支配を受けてどのように変化したか、あるいはローマにどのような影響を与えたかを検討することは、ローマの支配の実態をより明らかにできるものと考えられる。本稿では、属州パンノニアについて、その地理的条件から先住者が携わっていた河川輸送（とりわけ西部のサヴァ川・ドラヴァ川における）をとりあげる。ローマは河川輸送を経済的に重要視したために、流域を都市化したり、陸送との連結を強化したりした。そして先住者を中心とした流域民の生活は、雇用機会の増加や広域交易などの変化を受けた。

3世紀初頭セウェルス朝期は比較的安定した国内状況から、パンノニアの繁栄期とされており、物資の輸送や属州間交易も増加し、河川輸送も活発化したと考えられる。碑文からは舟運関係者の活躍が読み取れる。また、「ローマ化」していない内陸部の先住者の集落遺構の発掘成果から、彼らも何らかの形で河川輸送を中心とした輸送ネットワークに関与していたことの可能性が読み取れる。流域の経済基盤が強まったことで、その後、この地域出身の皇帝を輩出する原動力となったとみなすこともできるであろう。

このように先住者とローマの関係は、ローマが一方的に影響を与えるのではなく、相互に影響を及ぼし合う関係であったと言えるのである。

はじめに

古代ローマ人がその勢力をイタリア半島外の地域に拡張し、次々と支配した土地を属州に組みこむ過程で、彼らが足を踏み入れた土地は不毛で全くの無人であったわけではなかった。ガリアやヒスパニアにしても、ブリタニアといった辺境の地にしても、多様な人々がその土地に既に長らく住まい、産業を営み、固有の文化を育んでいた。ローマ人は彼らの社会構造や慣習の上に自分たちの政治や法の制度を持ち込み、経済圏に含んでいったのである。

ところでローマ史研究の中で、ローマの属州となる以前の土地に居住していた人々は、あまり好意的に扱われてこなかった。ギボンのように、無文字の民族の歴史は見るべきものがないと切って捨てる主張¹⁾は極端としても、ローマ到来以前からの先住者がローマ帝国の一属州民となった後どのような生活を送ったかは、いかに彼らが「ローマ化」したかという視

点から²⁾、或いはローマ帝国の圧政によって抑圧され、収奪されたかという視点³⁾から語られることが多かった。このように「ローマ対先住者」という枠組みを設定する二項的論点では、先住者の独自性は全く無視される。対ローマの反乱を起こす時は別だが、それ以外の場合は属州民として一括され、ローマ中心主義にからめ捕られてしまうのである。

しかしながら、「ローマ帝国」の実態により即したローマ史研究には、「ローマ帝国」の構造が多様な先住民族の混成で成り立っていることを今一度確認をした上で、ローマの中心行政機関や軍事組織が、これらの先住者の集団にいかに対処し、それらをどのようにまとめ上げていったかを検討の対象に含める必要があるのではないだろうか。つまり、ローマの支配の体制や方式は帝国全土で一元的であったのか、それともそれぞれの地域の個別的な実情に即して柔軟な対応がとられたのか、を問うことになるであろう。ところで、ローマ史研究で先住者を中心視点に据えるということは、その先住者が居住する地域の研究にはほかならない。このようなローマ帝国研究に新たな観点を提供できる手法として、例えば、ある特定の地域の先住者が持つ独自の文化や伝統が、ローマの支配下でそれ以前と同様に維持されたのかという文化の連続性と、それが「ローマ化」によって変化、変質したのか、あるいはまったく失われてしまったのかというローマとの影響関係を検討することが挙げられる。この手法はローマの属州とその支配の実相を明らかにする一助となるのではないだろうか。本稿ではこのような手法を用いて、ローマ帝国の属州の一つであったパンノニアで、太古から行われてきた河川輸送のローマ時代における実態を考察する。そこから明らかになるのは、ローマによる先住者の文化の圧殺ではなく、また先住者によるローマへの無気力な服従でもない、両者の相互作用的關係であると考ええる。

属州パンノニアはローマ帝国の北部を占め、ドナウ川を隔てて「蛮族の地」と対峙している。この土地には少なくとも石器時代からイリュリア人と呼ばれる人々をはじめ多様な人々の居住地があった。紀元前4世紀頃からケルト人が侵入し、イリュリア人その他の先住者を制するようになった⁴⁾が、それぞれが敵対関係にあるというより、ゆるやかな住み分けをしていたと考えられる。彼らが農耕や牧畜を営んでいたことは考古学的に認められている⁵⁾。またパンノニア地域を流れるドナウ川・ドラヴァ川・サヴァ川とその多数の支流を使って河川輸送を担っていたことは、古代の著作⁶⁾からも確認できる。

しかし彼らの存在は、ローマの支配が安定し始めるある時期から、同時代の著作からも見えてこなくなる。そのため属州パンノニア史の研究では彼らについてそれ自体の考察はあまりなされず、パンノニア駐留軍団のゲルマン諸族との抗争や東方遠征など、軍事に関連した属州情勢が主たる研究テーマであることが多かった。考古学でも、ケルト人やイリュリア人についてローマ以前の出土品は分類・研究されても、属州になってからの時代の出土品は、ローマ化の度合いばかりが注目されているように思える。

本論ではこのような研究動向に見られがちな、ローマ帝国のローマ人を絶対視し、属州となった土地に以前から居住していた人々の存在を希薄化するような見方に、疑問を投げかけ

たい。先住者独特の生活様式は、ローマの支配下で完全にローマ化してしまうことなく、通奏低音のごとく存続していたのではないだろうか。同時に、それにはローマ文化の直接の影響を受けて、変化していく部分もあったであろう。また「ローマ化」で受容された「ローマ的」なものの、現地の実情やニーズに合わせて変化した⁷⁾。ローマから移入された要素と属州固有の要素は、相互に影響を与え合う関係であったと考えられる。

本稿では、先住者の文化の「連続性」とローマ帝国との「影響関係」がパンノニアに存在したという認識をもった上で、ローマ以前からのパンノニアで先住者が携わっていた河川輸送に着目する。河川輸送はヨーロッパで太古から営まれ、ローマ時代でも主要な輸送手段であった。パンノニアでは北部から南部へ流れるドナウ川、中部のドラヴァ川、西部のサヴァ川が多数の支流を伴う主要河川であった。ドラヴァ川とサヴァ川はともに東部でドナウ川と合流する。それぞれの川は木材や日常品などを近隣の土地へ運ぶ生活のための輸送路であり、また後述するように、三本の川は、北はバルト海、西はアルプス山脈とアドリア海、南東は黒海に通じる広域の物流ネットワークをも形成していた。これらの川の河川輸送は、ローマ以前からパンノニア在住民の生活に組み込まれていたが、ローマ時代、とりわけパンノニアが繁栄したとされるセウエルス朝期ではどのように機能していたのであろうか。

本稿では、軍団の直接の影響が少ないと思われるドラヴァ川とサヴァ川の河川輸送と流域民の活動を中心に考察する。これらの川での河川輸送の継続・発展・変化を見ることを通して、文献や考古資料が少ない属州民の実態を多少なりとも明らかにできると考えるからである。同時にそれは、政治や軍事の影に埋没しがちな属州民の存在と活動が、ローマ帝国にとってどのような意義をもっていたかを問い直す機会となるであろう。

なお、属州パンノニアは紀元後 106 年に上部パンノニア（総督府所在地カルヌントゥム）と下部パンノニア（総督府所在地アクインクム）に分割されたが、本稿では区別なしに「パンノニア地方」として扱う。また、各川の名称は古代において、ギリシア語やラテン語で複数の呼称があったが、本論では煩雑を避けるために現在の呼称—ドナウ川・ドラヴァ川・サヴァ川—に統一する。

第1章「ローマ化」「属州化」中心の議論からの脱却

I-1 問題の所在と先行研究

A パンノニアの地理的特徴

まず、パンノニアとはどのような土地であり、ローマがどのような意図を持ってこの土地を属州としたかを検討してみよう。

地理的にパンノニアと呼ばれるようになった土地の西部は、イタリアの最東端に接し、またアドリア海沿岸のダルマティアに隣接している。パンノニア北部からアルプス山脈の裾野を通り、アドリア海に通じる山越えの道が通っているが、この道は「琥珀の道」とも称さ

れ、太古から北海地方と地中海を結ぶ交易路であった。初代皇帝アウグストゥスはオクタウィアヌスを名乗っていた早い時期からパンノニア西部を流れるサヴァ川流域を支配下に置き、ここを足がかりにして北東部へ軍を進出させた。紀元前 33 年頃までには、ドナウ川を帝国と「蛮族の地」との境界線に設定し、属州パンノニアが形成された⁸⁾。

パンノニアを流れる主要な河川はドナウ川・ドラヴァ川・サヴァ川であるが、ドラヴァ川は東部のムルサ付近でドナウ川と合流、サヴァ川はシンギドゥヌム付近でドナウ川と合流する。またこの三本の川は「琥珀の道」と交差している。物産は北海地方からもアドリア海地方からもこの陸路を通して輸送されたが、同時に川を使ってパンノニア内陸部へも入ることができるし、さらにドナウ川の中流・下流を経由して黒海方面へ向かうこともできた。この地理上の知識は古代でもこの地域の先住者はもとより、ギリシア人・ローマ人にも共有され、河川と陸路を組み合わせた物流ネットワークが存在していた⁹⁾。

一方、ドナウ川は川向こうのカルパティア平原に住むゲルマン人やサルマタイ人など「蛮族」とローマ帝国とを隔てる境界線に設定され、沿岸には軍団が駐留する都市や、見張り台や小砦といった軍事施設が建設された。つまり、ローマはパンノニアを経済的にも軍事的にも重要な地域と認識していたのだ。

ところがパンノニア研究の中で、この属州の経済問題それ自体について語られることは少なく、主に軍団と関係付けられて研究されてきた。「蛮族の地」との境界線についての研究は枚挙にいとまがないほどである¹⁰⁾。

B 「ローマ化」と先住者の独自性に関する先行研究

ローマは支配下に置いたパンノニアの各地に都市を建設した。その多くはローマ到来以前からこの地に住む現地人の居住地を踏襲したものである。サヴァ川・ドラヴァ川沿いの都市、エモナ、シスキア、ポエトヴィオなどはほとんどこのように成立した。一方ドナウ沿岸では、カルヌントゥム、ブリゲティオ、アクインクム、インテルキサなど軍団の駐留地が都市へと発展したものもある。都市には水道設備、公共浴場やローマの神々を奉った神殿などローマ的インフラが建設された。円形闘技場が建設されることもあり、カルヌントゥムとアクインクムでは、軍団駐留地用と民間居住地用にそれぞれ建てられた。いわゆる「ローマ化」が図られたのである。

ローマ帝国各地の属州における「ローマ化」¹¹⁾は通常、円形闘技場・公共浴場・神殿のような公共建築物の建設、テッラ・シギッラタという高級食器の使用や漆喰細工・壁画・床モザイクのような室内装飾の個人邸宅への採用などに表れていると説明される。先行研究では、Haverfield がこのようなローマ文化の帝国内での均質的な広がりを「ローマ化」と定義した¹²⁾。彼は現地人の都市エリートがローマへの服従、或いは憧れを表明するため率先してローマ文化を採用したと主張¹³⁾、その後もこの理論を踏襲する研究がなされてきた¹⁴⁾。ローマ的生活様式は都市エリートから徐々に一般都市民に広がり、さらには郊外に住む人々もある程度ローマ的な要素を取り入れた。属州民はその固有の社会や伝統文化よりローマ的要素

を優先した。この場合、強大な軍事力を背景にしたローマが政治・軍事・文化の各面で、属州化以前から存続していたその土地の独自性を圧倒し、自己のそれに包含していったという図式が成り立つ。

C 近年の研究動向における変化

しかし近年各属州における「ローマ化」の事例研究から、「ローマ化」は従来唱えられてきたほど均質で統一的なものではなく、都市や地域ごとに差異や特徴が見られるという議論がなされるようになってきた。エージェント理論の影響を受けた考古学者はさらに、属州民によるローマ文化の受動行為に着目する。例えば Revell は、一般都市民は確かに日常的にローマ的な建造物や彫像などを目にしていたので、ローマ的な思考法をある程度持つにいたることもあっただろうが、その発現には彼ら独自の解釈や伝統が反映されていると主張し、ブリタニアやヒスパニアでの建造物や都市景観に見られる事例を挙げている¹⁵⁾。この場合、属州民はローマ的なものから影響を受けると同時に、彼らの独自性がローマ的なものに影響を与えるという相互作用があったと言えるであろう。

レヴェルの著書のように、2000 年前後からの研究は「ローマ化」理論に一定の留保をもたせる傾向をもつようになった。ローマ帝国が強権を行使して、一律に各地の属州を支配していたという考え方も再考が促されるようになっており、包括的にローマの支配体系を論じる姿勢から、個別事象の研究に軸足が移っているように思われる¹⁶⁾。またローマ帝国の支配下にあった地域や地方の独自性に着目する傾向から、属州民のアイデンティティーについても、各属州の地域に根ざした「ローカル・アイデンティティー」、「マイクロ・アイデンティティー」と、帝国全体から論じた「グローバル・アイデンティティー」、「マクロ・アイデンティティー」を考察の対象とする研究も増加している¹⁷⁾。

D パンノニアにおける「ローマ化」と属州民に関する先行研究

パンノニアの先行研究においても「ローマ化」が考察の基底となっていた。パンノニアの先住者であるイリュリア人やケルト人については、考古学的遺物がさかんに研究されているが、それはローマ支配以前の時代が中心で、ローマの属州となつてからの彼らの動向や生活の様子は、それ自体で研究されることはあまりなく、どれほど「ローマ化」したかという観点から考察されることが多い。特に、古代パンノニアであった地域が第二次世界大戦後ソビエト連邦の衛星国となつてからは、マルクス史観に基づく解釈がなされるようになった。

旧チェコスロバキアの研究者 Oliva は、ローマ支配後の属州民の活動について大戦前の先行研究をいくつかとりあげ、また碑文や考古資料を用いて詳述しているにも関わらず、属州民は重税と兵役の負担にあえぐ、搾取された民だったと見なしている¹⁸⁾。彼の主張では、2～3 世紀のパンノニアの繁栄期¹⁹⁾に、帝政の危機が始まる²⁰⁾。具体的には、パンノニアの繁栄期にその恩恵を享受したのは一部の人々、つまり軍団関係者、商人、都市エリートであり、ローマ化していない先住者、奴隷、コロヌスから成る貧困層は、かえって増加する軍需物資や重税の負担で苦しんでいた。また、軍隊に入ったり、都市エリートになったりした少

数の先住者と、そのような機会のなかった先住者との間に格差と分断が生じた²¹⁾。経済の基盤となっていた農業も、軍団が農民の耕作地を徴発して、軍団用の食糧生産や家畜飼育に充てたため衰退する。軍団の給料も現物支給となり、貨幣経済が危うくなった²²⁾。オリヴァはローマ帝国の経済は奴隷制を基盤としているという前提に立っている、パンノニアの先住者社会では奴隷制がなかったことを認めつつも、帝国全体における奴隷経済崩壊と属州パンノニアの先住者下層階級の貧困化を強引に結び付けようとした。

また、ハンガリーの研究者でパンノニア研究の泰斗と目される Móczy は、その後のパンノニア研究に大きな影響を及ぼしたが、先住者の「ローマ化」をパンノニアの繁栄や衰退の指標とする。彼は墓碑など碑文の出土数から、セウエルス朝時代にドナウ川地域で軍団の碑文慣習が急速に広まったことに着目する²³⁾。富裕層のみならず、一般兵士も墓碑を建立できるようになったのは、軍隊が経済的に優遇されていたこと示す、と見る²⁴⁾。また、軍団名で建立された碑文は、軍団の政治力を表している、と推測する²⁵⁾。一方、同時期のパンノニア内陸部（サヴァ川、ドラヴァ川流域を含む）では逆に、1～2世紀前半に盛んであった碑文慣習が減少する²⁶⁾、また、馬車を遺体とともに墓に埋めるという先住者の埋葬の風習も少なくなつて、簡素な墓が増加する²⁷⁾ という傾向がみられる。モーチはこの理由を、パンノニア内陸部では、2世紀に騎士層を構成していた都市の富裕層と中間層の土地所有者が、セウエルス朝期に皇帝所有のウィッラや大規模農園が増加したことで財力を失い、都市経営から離れたり、碑文を建立できなくなったり、豪華な墓を作れなくなった、と考えた²⁸⁾。

オリヴァもモーチも属州民の貧困化を強調することで、帝国の属州経営の脆弱さを明らかにしようとした。それが4世紀半ばからドナウ川を越えて頻繁に侵入するようになった「蛮族」を軍団が防ぎきれず、やがて属州パンノニア、さらにはローマ帝国そのものの崩壊に繋がる遠因であったとする。

E 文献資料と考古資料の再検討に基づく新しい研究

以上のような従来の研究における一面的な属州民観は、文献と考古資料の乏しさから導きだされてきた結果であることは否めない。3世紀初頭アレクサンデル・セウエルス帝の下でパンノニア総督を務めたカッシウス・ディオは、著書の中で「パンノニア人」は戦うことは上手で勇敢だが、気候や土地柄に恵まれないため、人類で最も惨めな生活をしている民族と述べている²⁹⁾。また、ディオと同時代の歴史家ヘロディアヌスも、彼らは体格が良くて戦士に向いているが、知的に劣るので巧みな言葉で騙されやすいという偏向した見方をしている³⁰⁾。ローマ時代のパンノニアに言及する彼らの記述を文字通り受け取ると、確かに先住者の独自性はなくなり、ローマに完全支配される属州民の姿しか見えてこなくなる。

しかしながら、紀元後1世紀初頭のパンノニアの反乱を記述したウエレイユス・パテルクルスは、パンノニア人がローマの規律もラテン語も知悉し、文字も使い、見事に作戦を遂行できる民族である、と述べている³¹⁾。本稿の第Ⅱ章Ⅱ-2で検討するように、ストラボンや大ブリニウスはサヴァ川・ドラヴァ川での活発な河川輸送を記している。この対立するよう

に思える二つの属州民観に整合性をもたせて、パンノニア史をより実態に近づけることはできないのだろうか。

実はそれが可能となるような変化が、パンノニア研究には現れてきている。1980年代のユーゴスラビアの崩壊に伴い、属州パンノニアの西部、特に本稿でとりあげるサヴァ川・ドラヴァ川流域を構成する地域が独立して、スロヴェニア・クロアチア・セルビアの三国になった。それに伴い、この三国がそれぞれ自国領内でのパンノニア研究を始めた。考古学でも、旧ユーゴスラビア時代の発掘報告書の見直しや、再発掘を行っているようである³²⁾。

これらの研究成果から見えてくるのは、パンノニアが決して均質にローマの影響を受けていたのではないこと、また各地の実情や古来の生活に合わせてローマ的要素が逆に変化していたということだ。パンノニアについての考古学の新しい研究を概観した論文で、Wilkesは、「発掘と出土品研究が発達したおかげで、…かつては明確だと思えたものが不明確に、また歴史的発展の整然としたパターンがもっと混乱したものになってきたという事実は、ローマ時代のドナウ（引用者註：川だけでなく地方も含む）を理解する上で、歓迎すべき進歩であろう」³³⁾と述べている。

本稿では従来のパンノニア研究にとらわれず、最近の研究成果を踏まえた上で、ローマ帝国の中でも、「蛮族」と常に対峙しているために軍事的に重要であり、かつ、ドナウ川・サヴァ川・ドラヴァ川という主要な河川輸送路と「琥珀の道」という重要な陸路をもつために経済的にも重要であるという特異な地理的条件をもつ属州パンノニアを、多様な視点から考察したい。

I-2 先住者の文化や伝統の持続と変化

「はじめに」でも述べた通り、ローマ帝国の属州では、ローマ支配以前からそこに住んでいた先住者が、独自の文化と伝統を育んでいた。パンノニアでも同様であったが、本稿では、先住者が営んできた河川輸送を中心軸にすえて、それがローマ支配を受けても持続していたこと、そしてローマ帝国の一部を構成する属州であったことから、それ以前とは異なる様相をもつにいたったことを考察する。

河川を輸送手段として用いることは、ヨーロッパでは石器時代から行われてきた。これは河川という地理的条件を生かした河川沿いの住民の文化といえよう。このような気候や地理という環境条件により規定される人間活動はしかし、社会・政治・法などの変化により何らかの変化を被り、また他方では、環境条件による人間活動の存在が逆にその他の人間活動に影響を及ぼすことも起こりうると思われる。

ローマが到来する遥か以前からパンノニアの地で営まれていた河川輸送を中心とした物流は、紀元前30年頃から紀元後5世紀頃まで約400年のローマ帝国支配を受けて、本稿の第II章以下で明らかにするように、重要視され、活性化した。特にマルクス・アウレリウス帝治世から始まり、セウエルス朝期にピークとなったドナウ沿岸都市へのシリア人（兵士と

一般人)の集団移住は、ドナウ川の物流に対する何らかの経済的意図を持って行われたと考えられる。

後述するように河川輸送はローマ時代以前から長らく営まれていたが、ケルト人やイリュリア人が川の沿岸に部族単位の居住地を構えていたため、上流から下流まで一貫した輸送はできなかったのではないだろうか³⁴⁾。しかしローマ帝国の属州であった期間は、属州内はもちろんドナウ川下流の黒海から東方の属州へ、また「琥珀の道」の終点であるイタリアの港アクイレイアからアドリア海沿岸の諸属州や地中海周辺諸地域へ、広域への物流が以前より円滑に行われるという変化が起きた。

一方「蛮族の地」との境界であるドナウ川には軍団都市が築かれたため、物流は軍団向けのものでかなりの割合を占めていた。また、黒海沿岸をはじめ内陸部には帝政初期からシリア人商人が居住し、黒海から東方への交易を担っていた。シリア人の進出が加速したのは、紀元後2世紀後半からで、マルクス・アウレリウス帝がシリア人弓兵をドナウ沿岸都市に配置したことに始まる。セプティミウス・セウェルス帝はシリア人の妻ユリア・ドムナを通じて属州シリアの都市エメサと深いつながりがあり、多くの兵士をドナウ沿岸の軍団都市インテルキサに住まわせた。兵士と共にその家族・親戚だけではなく、商人や職人も移住して、インテルキサにはシリア人コミュニティが形成された。また都市の有力者となったシリア人もいる。この状態は4世紀頃まで続いた。この間ドナウ川の河川輸送では、属州外との交易が以前より活性化したと考えられ、これも変化と見なしうる。

ローマ支配以前から持続したパンノニアの河川輸送は、ローマ帝国に組み込まれることで変化を受けたが、同時に属州パンノニアにおけるローマの統治形態や経済状態も、河川輸送の活性化からの影響を受けて何らかの変化があったと考えてよからう。以下の本稿ではパンノニア西部のサヴァ川・ドラヴァ川における民間人による河川輸送が、ローマの支配を受けていかに変化したか、また属州パンノニア史にどのような意味を持ったかを、文献及び考古資料を用いて多角的に考察したい。尚、ドナウ川における軍団の存在という特殊性とシリア人の活動は、将来的な研究課題としておき、本稿では扱わないことにする。

第Ⅱ章 ヨーロッパとパンノニアにおける河川輸送の歴史

II-1 ローマ時代の河川輸送

舟運の歴史は鉄器時代以前にさかのぼることができる。小アジアのウルブルン沖で発見された沈没船は、紀元前14世紀末の交易船であった。船体は全長15mの杉材製で、積載量は20tもあった。出港地・目的地共に不明ながら、驚愕すべきはその積荷の多様性にある。多量の錫銅のインゴット、イタリアで作られた刀剣、バルト海産のビーズや琥珀など、ヨーロッパ各地の物産も積まれていたのである。この時代すでに、これらの物品をそれぞれの産地から陸送や河川輸送によって海港へと運搬し、そこから海運で別の場所へと意図的に運ぶ

交易ルートが存在したことが窺われる³⁵⁾。また河川輸送については、紀元前 1000 年頃の丸木舟がブリテン島から出土している³⁶⁾。このように太古から海運、水運ともに広域交易も視野に入れた活動がなされていた。

ローマ時代、特に帝政期になると、河川輸送は広大な帝国各地を結ぶ物流ネットワークに組み込まれ、それ以前よりさらに重要度を増した。また河川そのものは船舶航行だけでなく水利、漁業など多様な利用方法があり、それに伴う利害の対立を回避するため、2 世紀末から 3 世紀初頭の法学者ウルピアヌスなどにより綿密な法が整理された³⁷⁾。さらに河川や水路は土地の境界にもなることから、洪水に伴う流路の変化が土地の所有権争いになった時のためにも、河川をめぐる法律は重要であった³⁸⁾。ローマ当局による厳密な河川管理が行われていたと想像されるが、これらの法律やそれに伴う法的処置は主にイタリアの判例に基づくもので、属州ではどの程度適用されていたかは不明である³⁹⁾。いずれにせよ、ローマが河川に関わる諸事に重大な関心を払っていたことは明らかだ。

ローマ時代にどのような舟を用いて河川輸送をしていたかは、考古資料や文献から判明している⁴⁰⁾。浅浮雕レリーフでは、ライン川でワイン樽を輸送している軍団の舟を表したノイマーゲンの墓碑彫刻（トリアー博物館蔵）や、トラヤヌス帝のダキア侵攻を描いた記念柱の、ドナウ川沿いに建つ倉庫群と川舟⁴¹⁾が当時の様子を表している。舟は漕ぐばかりではなく、上流に遡る際や川の水量が少ない時など漕ぐことが困難な時は、イゲルの円柱浮彫（トリアー博物館蔵）が描写しているように、人間或いは動物が舟を曳行した。曳き船用の道が川沿いに通っている場所もあった。これらのレリーフの図像から舟の形状が様々であったことが見て取れるが、実際には積荷や気候・水量などの諸条件に合わせて、同じ川でも異なる種類の舟を用いていたであろう⁴²⁾。

文献では、アンミアヌス・マルケリヌスにより、376 年ローマ皇帝からドナウ渡河の許可を得たゴート族が、舟で避難する様子が以下のように記されている。

ドナウ川を渡る皇帝の許可を得て…彼らは昼夜分かたず数日間、舟（navibus）やいかだ（ratibus）や丸木をくりぬいたもの（cavatis arborum alveis）に集団ごとに乗り、ドナウ川を越して運ばれてきた。（Amm. XXXI, 4.5 筆者試訳）

「丸木をくりぬいたもの」は丸木舟のことだろうか。

舟の他にいかだも使われているが、これは原初の輸送手段であり、ローマ時代以前から用いられていたであろう。木材を切り出していかだに組み、他の物品（石材・鉱物・食品など）とともに動物や船客も載せる。途中各川港で積荷や船客を載せ替え、最終目的地でいかだをほどいて木材として売るという、単純な技術で高い効率があげられる輸送手段である⁴³⁾。

碑文資料では船主や船乗りの組合が存在しており⁴⁴⁾、河川輸送が専門家集団によりに行わ

れていたことを裏づけている。

II-2 パンノニアにおける河川輸送

A パンノニアの河川

すでに述べているように、パンノニアには3本の主要河川とその支流が多数流れている。

ドナウ川は、アルプス山中から黒海までの全流域面積 817,000 平方km、流路延長 2800kmの大河である⁴⁵⁾。パンノニアを流れるのはその上流から中流部分となる。サヴァ川はアルプス山中に源流があり、流域面積 97,713 平方km、流路延長 944km で、ローマ時代の都市シンギドゥスム（現ベオグラード）でドナウ川に合流する。沼沢地や湿地帯が多く、現在ラムサール条約に登録された湿原 4 か所ある⁴⁶⁾。ドラヴァ川は流域面積 40,100 平方km、流路延長 725km で、ローマ時代の都市ムルサ（現クロアチアのオシエク）でドナウ川と合流する。現イタリア領ドロミテ山中の水源地点の海拔は 1,450m であるのに対し、ドナウ川との合流地点の海拔 90m で、標高差 1,360m と流れが速い。しかし、現在は流域のオーストリア・スロヴェニア・クロアチアで計 22 か所の水力発電用ダムがあり、流れが弱まっている⁴⁷⁾。

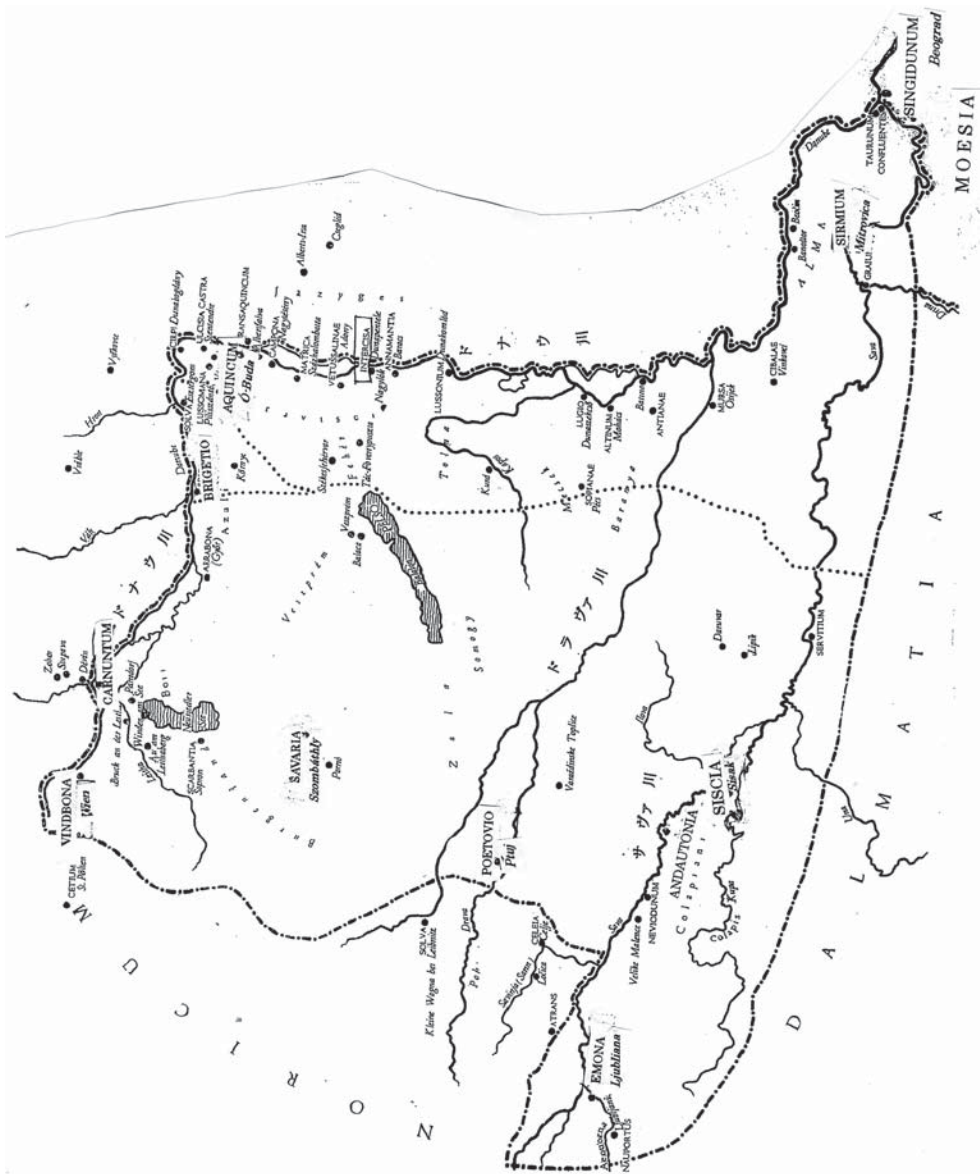
これらの河川を使った商業の存在を明らかにする出土碑文の中には、「商人」を意味する negotiator や mercator という語が刻まれたものがいくつか存在する⁴⁸⁾。その中で本論が対象とする 2 世紀から 3 世紀初頭に建立されたものとして、例えばドナウ川とドラヴァ川の合流地点ムルサで出土した碑文 (*ILJug* 1. 289, 175 ~ 225 年) では、一商人 negotiator がミトラス神への祈願文を記している。東地中海地域から伝わったとされるミトラス信仰は、主に兵士と商人が帝国各地に広めた。ドラヴァ川上流の都市ポエトウィオの税関役人（解放奴隷が中心）が建てたミトラス神の聖所も出土している。

またドナウ沿岸の軍団都市ブリゲティオからは、商人で、蛮族に殺された息子を悼む墓碑が出土している (*CIL* III, 11045, 175 ~ 225 年)。墓碑を建立したのは父親であるが、彼はブリゲティオのアウグスタレスの一員であり、おそらく彼も軍団関係の商人であったと思われる。彼の跡継ぎ息子はドナウ川向こうのゲルマン人と皮革・獣肉・織物などの取引に従事している最中に、何らかのトラブルに見舞われたか、商品をゲルマン人居住地へ運送途中、襲撃されたのかもしれない⁴⁹⁾。

B サヴァ川・ドラヴァ川における河川輸送の証言

本稿で考察対象としているサヴァ川とドラヴァ川について、(1) 紀元前 1 世紀末から紀元後 1 世紀初めのストラボンと (2) 1 世紀後半の大プリニウスは、それぞれ次のように記している。（引用の下線部は筆者による）

- (1) 残りの区域をパンノニア族が領し、(中略) 市（引用者註：セゲスティカ=シスキア）の方はパンノニア族の市で、いくつかの川が落合うところに位置し、何れも舟で往来できるほどの川である。…



地図1 パンノニア全図

MAP No.2 PANNONIA DURING THE PRINCIPATE (old names Roman type, new names italics) Oliva, P., *Pannonia and the onset of crisis in the Roman Empire*, Praha, 1962. を元に執筆著作作成。

この方面の山並みから何本かの川が流れ落ち、川は諸地方とりわけイタリアからの貨物を大量に運んでセゲスティカ市（引用者註：シスキア）へと下る。

アクイレシア市からオクラ山越えてナウボルトゥス市への道を行くと、その距離 350 スタディオン（65 キロ）、市までほろ付きの荷車が入って行き、（後略）。

ナウボルトゥスの近くにはコルコラス川があって輸送商品をここで受け取る。この川は

サウス川（引用者註：サヴァ川）へ注ぎ、後者はドラウス川（引用者註：ドラヴァ川）へ注ぎ、これがセゲスティカ市のあたりでノアロス川へ入る。最後の川は…ひじょうに水かさを増し、…ダヌウィウス川（引用者註：ドナウ川）に合流する。これらの川の舟運は大半が北へ向う。…セゲスティカ市のすぐそばにシスキア砦市とシルミウム、何れもイタリア地方へ通じる道中に位置する。（Strabo, VII 5. 飯尾都人訳）⁵⁰⁾

(2) 次はドングリを産するパンノニアである。アルプス山脈の山麓は、この地でだんだんとなだらかになり、イリュリアの土地の真中を北から南へと、右に左に曲がりながら平らになっていき、平地となる。アドリア海に面する場所はダルマティア及びイリュリウムと呼ばれている。パンノニアは北の方へ向かい、ドナウ川で区切られる。そこにはエモナとシスキアという植民市がある。ドナウ川へ流れ入る航行可能な主な河川は、ノリウムから流れる、より急流であるドラヴァ川と、カルニー族の住むアルプス山脈から流れる、より緩やかな流れのサヴァ川である。この二本の川の間の距離は 120 マイルである。（Plin. *N. H.*, III 147. 筆者試訳）

サヴァ川流域はイタリアから比較的近距离にあったので、上記の記述は、著者本人が現地へ赴いて見てきたことを書いたか、或いは実際に行った人から聞いたことに基づいて書いたかであろうが、いずれにせよ現代の情報と比較してもかなり実態に近いと言える。この地域について情報が豊富であったようだ。これらの記事からは、著者たちの時代にこの二つの川で物流が活況を呈している様子が看取される。

II-3 サヴァ川・ドラヴァ川と陸路の関係

河川による輸送はそれ自体で成立することもあるが、河川の地理的条件や目的地の場所など様々な要素により、陸路と組み合わせられることもあった⁵¹⁾。例えば、ドナウ川中流の属州モエシア内で、現在のセベリア南部とルーマニア北部が接するところに「鉄門」と呼ばれる船舶航行の難所があったが、ここではいったん川から上がって、陸路を辿る必要があった。またライン川方面からの物品をドナウ川方面へ輸送するには、ライン川から積荷を陸揚げして山道を超えてから、ドナウ川の舟へ積み替えた。ローマがパンノニアやその周辺の地域を支配下に収めるはるか以前から、遠方からの物品は水路と陸路を補完的に組み合わせて運ばれていた。サヴァ川・ドラヴァ川は「琥珀の道」を介して、北海地方・ゲルマニア地方・アルプス地方とパンノニア、さらに黒海やアドリア海へ繋がる広域商業ネットワークともいえるべきものを形成していた。

古代の交易や物流に関しての近年の研究は、海路・水路・陸路を分けてそれぞれを考察するのではなく、この三種の運搬経路を組み合わせ、高コストの陸送と、低コストの水運による費用の平準化や、交易ネットワークとしての全体像を考察対象にする傾向が多く見られ

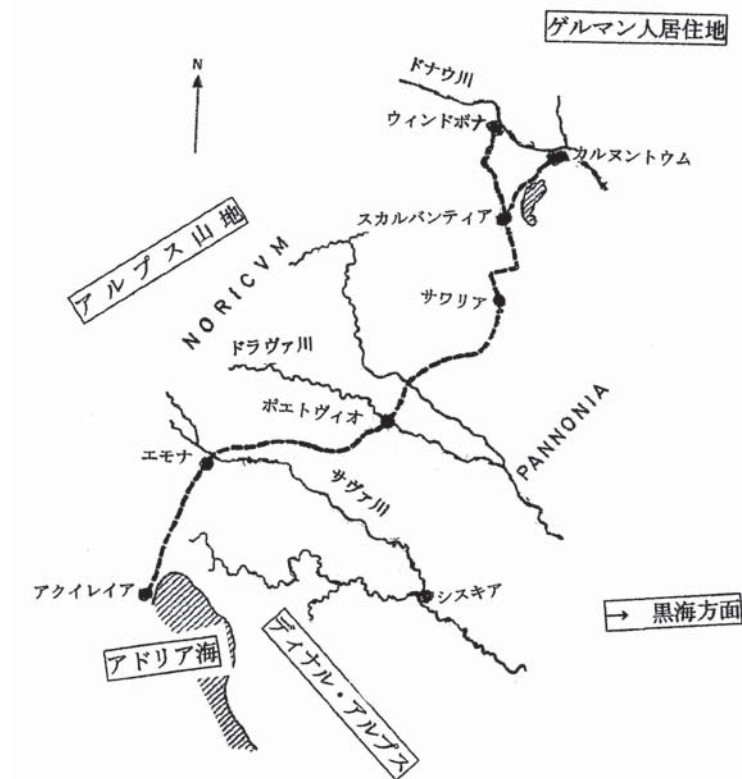
る⁵²⁾。本稿で扱うパンノニアは、上記のような地理的条件から、三本の主要河川を中心にしたネットワークが形成されやすかったと思われる。

A 「琥珀の道」

ここでパンノニアの主要河川と連結する重要な陸路「琥珀の道」について、簡単に触れておきたい。

いわゆる「琥珀の道」と研究者が呼ぶ交易路は先史時代よりバルト海とアドリア海を結んでいた。北海産の琥珀を主に運んだとされるが、ほかにも各地からの多様な物品の輸送に使われた。

琥珀はバルト海沿岸からユトランド半島にかけての広い地域で産出され、装飾品のほか魔除け・医薬などの用途がある貴重品であった⁵³⁾。琥珀以外には毛皮・奴隷が北海地方やゲルマニアから、陶器・美術品・装飾品がギリシアから運ばれた⁵⁴⁾。ローマ時代に入るとこれらに加えて、陶器・ワイン・織物がイタリアから、鉄・金・銀・銅・鉛が隣接する属州ノリクムやドナウ川下流から、大理石・花崗岩がノリクムから輸送されるようになったと考えられ



地図2 「琥珀の道」(太字点線で示す)

Póczy, K., 'Pannonian Cities', in A. Lengyel and G. T. B. Radan eds.,
The Archaeology of Roman Pannonia, Budapest, 1980. p.243. を元に執筆者作成

ている⁵⁵⁾。

そのルートは、北海沿岸地方やゲルマニアから支流を通してライン川に入って遡り、上流で短距離の陸路を経てドナウ川へ入るもの、或いは内陸から来て現在のウィーン近郊でドナウ川を渡って、陸路でアルプスの裾を西南へたどり、アクイレイアでアドリア海へ向かったりするものがある。途中ドラヴァ川・サヴァ川を渡河するが、渡河地点でドラヴァ川・サヴァ川に入って下るとドナウ川と合流し、さらに下って黒海へ出ることができた。

B 黒海・アドリア海との連結

黒海沿岸からドナウ川を遡り、シンギドゥヌムでサヴァ川に入って遡り、エモナなどで陸揚げして「琥珀の道」を通してアドリア海沿岸に出るルートもよく使われた。これが古代ギリシア時代から知られていた交易路であることは、アルゴ―船の伝説でコルクスの金羊毛を奪ったイアソン率いる一行が、追っ手から逃れるためにこの経路を辿ったとされることから推察される⁵⁶⁾。

またサヴァ川沿いの都市からディナル・アルプス山脈を越えて属州ダルマティアへ入り、アドリア海へ出る陸路もあり、ローマ時代に整備された。

II-4 流域の先住民

プリニウスとストラボンがパンノニアを流れるドナウ川・ドラヴァ川・サヴァ川の流域に居住する先住民について記述している。

プリニウスは『博物誌』III, 147～148で次のような人々を挙げる。

- ・サヴァ川流域の部族—コラピアニ、ブレウキ
- ・ドラヴァ川流域の部族—セレテス、シラビリ、イアシ、アンディゼテス
- ・両川流域の部族（場所特定せず）—アザリ、アマンティニ、エラウイスキ（ドナウ川沿いアクインクム近郊に居住、ケルト系）、ヘルクニアテス、ラトウィキ、スコルディスキ（ケルト系）、タウリスキ（ケルト系）など

一方、ストラボンも『地誌』VII, 5:1で

- ・タウリスキ（ナウポルトス市が拠点）、イアボデス（サヴァ川とディナル・アルプスの間が拠点か。イリュリア人）
- ・スコルディスキ（サヴァ川とドナウ川合流地点）などの部族名を記している。

他にも碑文や出土資料などから多数の先住者部族存在が確認できる。

- ・ボイイ（現ボヘミア居住、帝政初期にドナウ川沿いに移住したらしい。ケルト系）
- ・アラビアテス（アルプスふもと～バラトン湖に居住）、ヘラクニアテス（バラトン湖～ドナウ川べりに居住）この両部族は部族名がラテン語風なので、ローマが他所から移住させたか、複数部族を解体或いは再編成したものと考えられている⁵⁷⁾。

先住民の一つであるケルト人は、紀元前4世紀頃パンノニアへ移住し、すでにこの地に住んでいたイリュリア人その他より優位に立った⁵⁸⁾。彼らは紀元前2世紀後半からギリシア

やローマの貨幣の使用や模倣を始め、紀元前1世紀頃には独自のコインを発行する。それが何に使われたか、未だ解明に至っていないが、部族の支配領域内で使用されたと考えられている⁵⁹⁾。しかしながら、ケルト人は紀元前4世紀の第一次ポエニ戦争など地中海各地の戦役で、貨幣で給金を支払われる傭兵となっており、貨幣経済を古くから知悉していることから⁶⁰⁾、日常的に貨幣を使用していたのであろう。パンノニアでのケルトのコインは、一種の部族地域内通貨であったかもしれない。

ケルト人が領地内に入る物品に関税をかけていたことについては、カエサルが『ガリア戦記』第3巻1で興味深い事実を報告している。(下線部引用者)

カエサルは北イタリアへ出発するとき(引用者註：前56年)、セルウィウス・ガルバに第12軍団と騎兵部隊を指揮させてナントゥアーテス族とウェラグリー族とセドゥーニー族の領土へ派遣した。(中略)派遣理由は、アルプス超えの道を商人たちが通るときいつも、危険も大きく、多額の関税を課されたため、この障害を除こうと欲したことであった。(Caes. Gal. III, 1. 高橋宏幸訳)⁶¹⁾

この記述からは、イタリアからアルプスを越えてガリア地方へ向かう輸送ルートを完全にローマの支配下に置き、ローマ人以外が商品に関税を課することを阻止するというカエサルの意図が読み取れる。ケルト人が関税徴収システムをもっていたことは、パンノニアでもあてはまるだろう。パンノニアのケルト人のコインは、このシステムに何らかの関連をもっていたかもしれない。

II-5 陸上・水上交易路支配のためのローマによる戦略的都市建設

ローマはパンノニア統治のために、拠点となる場所に都市を築いた。大半は、もともと先住民部族共同体の中心地であった場所で、それを温存しローマ都市に作り替えていったものである。しかしドナウ川流域は「蛮族の地」との境界にあたるため、軍団の駐屯地が設置され、軍団のための仕事をする民間人居住地(カナバエ)を含む軍団都市と、ローマ以前からある先住者部族居住地の二種類の都市が併存したところもあった。カルヌトゥムやアクインクムなどであるが、それらは後に軍団都市と民間人居住地が合体して、自治市格(ムニキビウム)や植民市格(コロニア)を取得した。

本稿ではサヴァ川・ドラヴァ川流域が考察対象なので、両川の沿岸に建設された都市についてやや詳しく見てみよう。モーチやヴルケリッチとグラゼルの研究によると、フラウィウス朝期にサヴァ川沿いの先住者居住地にローマ都市が建設されたが、それはサヴァ川の水運を促進するなど経済的目的のためであった。後述のパンノニア出身のローマ海軍水兵たちは、退役後、故郷のサヴァ川沿いのシスキアやシルミウムに入植した可能性もある⁶²⁾。アクイレイア…アドリア海の港湾都市で、属州パンノニアの都市ではないが、「琥珀の道」

の終着地として重要。紀元前 181 年にローマの植民市として建設された。アドリア海沿岸地域やその後背地との交易の中心地で、ローマが東方へ進出する際の重要な足がかりでもあった。ストラボンは『地誌』の中で、この都市における活発な交易について以下のように記述している。(下線部引用者)

また、アクイレシアはこれこそ湾奥に最も近い町でローマ人が建設し、町より上の方にいる非ローマ人に備えて築いた砦だった。町まではナティソン川沿いに商船で 60 スタディオン (11 キロ) 以上も遡っていく。

また、この町はイストロス河 (引用者註: ドナウ川) 流域のイリュリア諸族を相手の交易市场に当てられてきた。後者は海産物、木の樽に詰めた酒、オリーブ油を幌付きの車に積み、地元民たちは奴隷、家畜、毛皮を運んで、それぞれに帰る。(Strabo, V, 5 飯尾都人訳、前掲書、377 頁)

エモナ…現スロヴェニアの首都リュブリャナになっている、先住者の居住地に設置された都市。「琥珀の道」沿いで、またサヴァ川をはじめ周囲に多くの川が流れている。紀元前 50 年にローマの植民都市となる。紀元後 2 世紀以降、石造の建造物が建てられるようになり、2 世紀半からは水道設備・浴場や神殿などの公共建築物が整備されるようになった。市の中心部には豪華な壁画やモザイクで装飾された住宅も建設された。2 世紀末から行政的にはイタリアに併合されたが、「琥珀の道」沿いの都市としてパンノニアの経済にとっても重要であった⁶³⁾。

ネウイオドヌム…現スロヴェニアのドルノヴォ (Drnovo) 近郊。サヴァ川沿いの都市で、エモナ―シスキアを結ぶ街道やアルプスからの道に面する重要地点である。ケルト系ラトビキ族の居住地⁶⁴⁾。ローマ軍駐屯地だったが、イタリア商人も居住していた。紀元後 79 年自治市格を得て Municipium Flavium Latobicorum Neviodunum となる。サヴァ川の港湾施設に伴うと思われる倉庫の遺構が出土している。また帝政初期から水道が設備されていた⁶⁵⁾。

アンダウトニア…現クロアチアの首都ザグレブ近郊のスチダリエヴォ (Šćitarjevo) に当たるサヴァ川沿いの都市。ケルト系ワルキアニ族の居住地⁶⁶⁾。シスキアとポエトヴィオを結ぶ道にも面している。紀元後 1 世紀から自治市となる。2 世紀から人口が増加し、水道設備や公共建築物・円形闘技場が建設される⁶⁷⁾。

シスキア…現クロアチアのシサク (Sisak) で、サヴァ川と他の 2 本の川の合流地点の重要都市。ローマ以前からギリシア人にはセゲスティカとして知られる。コラビアニ⁶⁸⁾、スコリディスキなどの先住者部族の拠点であったが、紀元前 35 年頃、ティベリウス (後の皇帝) がドナウ川を遡り、サヴァ川に入ってこの都市を攻撃、陥落させた⁶⁹⁾。この都市がローマにとって必要だったのは、既にローマ属州であったダルマティアとの交通路を確保するためであるとともに、次に計画していたダキア攻略の拠点にするためであった。翌 34 年には軍団

が置かれ、それに伴いカナバエと一般人居住区も建設された。後者には軍団及び一般人を対象にした商人が住んでいた。サヴァ川兩岸に居住地があり、橋のたもとに税関が設置された。碑文から市中には立派な公共建築物が存在した可能性が読み取れる。紀元後2世紀には水道が完備された。神官団や *collegium centonariorm* といった市の重要職の存在を示す碑文も出土している⁷⁰⁾。この都市はセプティミウス・セウェルス帝により優遇されたようだ⁷¹⁾。また、ディナル・アルプスからサヴァ川へ流れ込む支流のひとつで、大量の壊れたブロンズ像や巨大なブロンズ製品を積んだ沈没船が発見された。恐らくシスキアで溶解するために運搬していたと考えられる⁷²⁾。

シルミウム…ドナウ川とサヴァ川の合流地点であるシンギドゥヌム (*Singidunum* 現ベオグラード) からサヴァ川を遡った地点にある。紀元後1世紀末の行政機関と考えられている石造建築物は4世紀に宮殿に改築された⁷³⁾。3世紀半ば以降、多くのいわゆる「軍人皇帝」を輩出した都市である。ディオクレティアヌス帝が帝国の四分割統治を始めてからは、帝国の四首都の一つとなった。

ポエトウィオ…現スロヴェニアのプトゥユ (*Ptuj*) で、「琥珀の道」のドラヴァ川渡河地点の都市。石器時代から先住民の居住地であった。紀元後70年頃から軍団駐屯地となったが、軍団は後にカルヌントゥムに移転し、軍団の駐屯地跡に建設されたドラヴァ川南岸の民間人居住地と、橋建設後に建設された北岸の居住地は、トラヤヌス帝時代に植民市 *Colonia Ulpia Trajana* となったと考えられる。市中には豪華に装飾された建物や住宅があり、2世紀から倉庫群や税関が建てられた。郊外には陶器やレンガを焼く窯もあった。都市周辺にはヴィラが存在しており⁷⁴⁾、カルヌントゥムの軍団を退役した兵士がここに入植したとされる⁷⁵⁾。

ムルサ…現クロアチアのオシエク (*Osijek*) で、ドラヴァ川右岸の都市。ドラヴァ川を少し下るとドナウ川と合流する。商業が盛んで、紀元後2世紀には橋のそばにテラコッタ製の装飾品やブロンズの像を売る店あったとされる⁷⁶⁾。

カルヌントゥム…現ウィーン近郊にあった都市。「琥珀の道」のドナウ川渡河地点であった。紀元後6年頃以降は軍団都市となった。民間人居住地もあり、両者が合わさってハドリアヌス帝時代に自治市となる。その頃から石造建築物の建設が始まった。また商業施設も存在して⁷⁷⁾、交易都市としても栄えたようである。

以上見てきたように、ローマは先住者の居住地を都市化することで、古来の交易路である「琥珀の道」および主要な河川（ドナウ・ドラヴァ・サヴァ）の要衝を掌握した。これはパンノニア地域を軍事的・経済的に支配するためであった⁷⁸⁾。次項ではこれらの都市およびその近郊に居住していた人々について考察する。

II-6 サヴァ川・ドラヴァ川流域の住民

A 流域住民によるローマ文化の受容

この地域、特にサヴァ川流域はイタリアに近接するため、住民が早くからローマ文化に慣

れ親しんでいたことは、前に簡単に触れたが、そのような住民の様子を記したウェレイユス・パテルクルスの著書『ローマ世界の歴史』の箇所（第110章2、5～6）をもう一度詳しく見てみよう。（下線部引用者）

（引用者註：紀元後6～9年のパンノニア反乱についての記述）2…このとき、長期の平和による恩恵に慢心し勢力が充実したパンノニアと、地域の全部族を作戰の同盟関係に引き入れたダルマティアが武器を取った。（中略）5だが、パンノニア人は誰もが、ローマの規律のみならず、言葉まで心得ていて（linguae quoque notitia Romanae）、ほとんどが文字を使い（plerisque etiam litterarum usus）、精神の鍛練にも慣れ親しんでいた。ヘラクレスにかけて、これほど作戰どおりに熟練した戦いを行ない、決定どおりの実を上げた民族はかつてなかった。6ローマ市民たちは制圧され、商人たちは切り殺された。多数の部隊兵が指揮官から遠く離れた地域に駐屯していたが、一人残らず殺された。（西田卓生・高橋宏幸訳、前掲書、188頁）

ラテン語やローマの規律を知悉し、ローマ軍の作戰をわが物として戦えるということは、サヴァ川流域では帝政初期に既にローマ文化を受容し消化できる素地があったと考えられる。それは都市の先住者エリートが率先してローマ文化を取り入れた結果だけであったのだろうか。従来「ローマ化」は、ローマ側が属州にローマ的文化を押し付け、一方属州民エリートは保身のため、ローマ文化を宣伝する役を担ったと言われる⁷⁹⁾。しかし上記の引用箇所からは、この地域がイタリアと近いため、先住者が古くから交易などを通して自然とローマの文物に触れ、自分たちにとって有益なものを自主的には吸収していたことが推察できるのではないか。

ローマ市民や商人が殺された具体的な都市名は書かれていないが、前項で検討したエモナカシスキアでの出来事であったと思われる。帝政初期に既に商人が交易や物流のために、多数この地域に住んでいたことがわかる。

B 都市住民

では、II-5で検討した都市の民間人居住地にはどのような人々が住んでいたのだろうか。ほとんどの都市がローマの属州になる以前からの先住者諸部族の居住地であることから、それら先住者が引き続き住んでいたと思われるが、その他にもパンノニア外から移住してきた多様な人々も住んでいた。大別すると次のようになる。

- ・先住者エリートと先住者非エリート。先住者エリートはローマ市民権を与えられ、その中から、*princeps* や *praefectus* の称号を持つ都市の指導者が選出された。
- ・外来者、つまりイタリアなどからの入植者、退役兵の入植者、帝国各地からの商人や職人、パンノニア外に在住する商人や元老院議員や騎士階級の人々の代理で交易に携わる解放奴隷、など。これらの人々も富裕者として、都市のエリート層を構成し、その多くは先住

者の女性と結婚し、この地に永住した⁸⁰⁾。退役軍人の子孫はパンノニア駐留の軍団に入隊した。

このように都市には多様な人々が住んでいた。先住者エリートや入植して土地所有者として成功した者や商売で財をなした者は、都市の有力者として参事会会員・神官・コレギアのバトロンなどの要職に就任し、都市の運営に当たった。

ところでパンノニアの都市エリートの特徴として、ローマの元老院議員になった者がほとんどいないことが挙げられる。例外として、デキウス帝は元老院議員であったと伝えられる⁸¹⁾。しかし騎士階級は多かったようだ⁸²⁾。彼らは軍団に入隊し、その中での立身出世を図った。いわゆる「軍人皇帝」はパンノニアの軍団兵の中から皇帝に選出されたケースが多く、シルミウムなどサヴァ川流域の出身者がほとんどである⁸³⁾。この現象は軍事的理由から説明されてきたが、その背景にサヴァ川流域の経済的繁栄による住民の経済的基盤の充実と、その結果流域民の一体化の促進、また彼らの発言力の強化あるのではないのだろうか。これは以下の章で検討する。

C 操船技術に長けた流域民

パンノニアの出身者が水兵としてローマ艦隊に加わっていたことを2世紀初頭に活躍した歴史家タキトゥスが報告している。ネロ帝の死後、皇帝位をめぐる戦いが繰り返される中、台頭してきたウェスパシアヌスについて述べる箇所では次のように記している。(下線部引用者)

ラウエンナの艦隊長ルキウス・バッシスは、まだ決断しかねていた水兵をウェスパシアヌス派に加えていた。その大半の兵が、当時ウェスパシアヌスが占領していた属州ダルマティアとパンノニアの出身者であった。(Tacitus, *Historiae*, III, 12. 國原吉之助訳)⁸⁴⁾

以下の本稿IV章のI-Bで舟の漕ぎ手や船頭のコレギアが建立した碑文を検討するが、古来河川輸送がさかんであった地域の住民は舟の扱いに秀でており、それが帝国内で十分に認知され、その能力が活用されていたことが見て取れる。

パンノニアの河川輸送はこのようにしてローマ時代も十分に持続された。ところで、これらの先住者や帝国各地からサヴァ川・ドラヴァ川流域に到来した人々は、セウエルス朝期にどのような生活の変化を経験したのであろうか。次章ではこの点を具体的に検討していきたい。

第III章 セウエルス朝とパンノニアの繁栄

これまでのパンノニア研究では一般に、セウエルス朝期にパンノニアは最大の繁栄期を迎

えたと言われている。この章では具体的にどのようなことが繁栄の証左とされているかを検討する。

セウエルス朝時代（193～235年）のパンノニアは、ドナウ川向こうの蛮族とは小競り合いはあったにせよ、目立った戦争状態になく、比較的平穏な時代であった。セプティミウス・セウエルス帝の妻がシリアのエメサの出身であるので、シリアとの関係が深まったことも注目できよう。エラガバルス帝とセウエルス・アレクサンデル帝は全くのシリア人であった。

この時代には大きな戦争や動乱がなく、東方のパルティアへ何度か遠征した以外は、帝国内の平和はおおむね保たれていた。そのため経済は安定し、活発になったと考えられる。パンノニアでもこの時代は繁栄したと考えられており、それは以下に述べる考古学的証拠から検証されている。しかし、同時代の文献でパンノニアの繁栄を記述したものはない。カッシウス・ディオやヘロディアヌスが著した同時代の歴史書も、経済的状况には言及していない。だが、約1世紀後のコンスタンティヌス大帝の時代の氏名不詳の人物が書いたローマ世界の地誌 *Expositio Totius Mundi*（57章）には、以下の記述がある。

それからパンノニアの地域であるが、この土地はすべてにおいて豊かである。駄獣や交易品と同様に農産物も豊富で、とりわけ奴隷（も豊富）だ。また皇帝の御座所も常にここにある。（筆者試訳）⁸⁵⁾

この文章からはパンノニアが交易のみならず、農産物の生産にも秀でていたことが読み取れる。

考古資料からは、都市の発展やインフラ整備など建築ブームと言える現象があったことが判明している。以下に主だったものを挙げてみよう。

まず都市の発展であるが、軍団駐屯都市カルヌントゥム（上部パンノニア首府）とアクインクム（下部パンノニア首府）が植民都市（コロニア）に昇格した（194年）。セプティミウス・セウエルスの皇帝即位をパンノニアの軍団が支持したことに対する報償であったろう。軍団と軍関係者の居住区と民間人居住区（カナバエ）それぞれに専用の円形闘技場が作られた⁸⁶⁾。またアクインクムの民間人居住区が発展し、道路拡張・フォルム拡大・商業施設（macellum）や複数の公共浴場の建設・水道の設置・豪華に装飾された個人住宅の建設などが行われた。これらは従来、戦禍にあった建物の修復と考えられてきたが、最近は大規模な都市再開発であった、という説もある⁸⁷⁾。

カルヌントゥムの民間人居住区も発展し、巨大な公共浴場や集合住宅（insulae）が建設された。インテルキサのシリア人居住地では床下暖房を備え、豪華な壁画を施された個人住宅が建設された。

また、皇帝一家のパンノニア全域巡幸（202年）に合わせて、各地で神殿などが皇帝と皇

帝の家族に奉献された。例えばセプティミウス・セウェルス帝が皇帝就任後、家族とともにパンノニアを巡幸した 202 年、歓迎のため建立された、皇帝家族に捧げられた健勝祈願碑文が Gorsium（現ハンガリーのターチ）で出土している。花崗岩製で高さ 72cm、幅 203cm の碑文の両脇には、花冠とヤシの小枝を持つ勝利の女神ヴィクトリアの像の浅浮彫がほどこしてある⁸⁸⁾。また、ドナウ沿岸のインテルキサ（軍団駐留都市、シリアのエメサから I Hemesenorum 大隊が駐屯）では、皇妃ユリア・ドムナに Deus Sol Elagabalus と Diana Tifatina の神殿を奉献した⁸⁹⁾。

インフラ整備もさかんで、各地で道路や橋の修理が行われた。碑文では皇帝の命を受けた総督名で修復していることになっているが、実際には都市が費用を負担するのが慣行であった⁹⁰⁾。道路や橋の修復の碑文は、他の皇帝名のものも出土しているが、それらはパンノニアの繁栄期と見なされる時期と重なっているものが多い⁹¹⁾。

パンノニアが繁栄して上記のような建築や開発がすすめられたとすると、それらの仕事に携わる人々が増加したことを意味する。パンノニアではローマ帝国の他の地域ほど奴隷を使用していないとされているため、工事に関わる肉体労働や、室内装飾などの美術製作も一般人が行った可能性がある。特にサヴァ川・ドラヴァ川周辺には道路建設などのインフラ整備を受け持つことが多い軍団が駐留していないので、工事監督や技術者以外は一般人が実際の作業を行ったのではないだろうか。

繁栄に伴って物資の輸送も増加し、輸送関係の雇用も増えたと思われる（次章参照）。建築ブームで雇用が増加したと相俟って、パンノニア西部では特に、一般人が職に就く機会が増加したと考えてもよからう。雇用の創出は従って、属州民の経済をも活性化することになったであろう⁹²⁾。

第 IV 章 パンノニアの繁栄と河川流域民の経済

IV-1 流域民の活動を考察する意義

本章ではサヴァ川・ドラヴァ川での河川輸送を中心に、特にセウェルス朝時代に流域ではどのような経済活動が営まれていたかを考察する。しかしながら、上に述べたように、この時代のパンノニアについて、具体的な状況を書き記した文献は非常に乏しい。そのため、考察は必然的に考古資料に頼らざるをえなく、先行研究として挙げているオリヴァやモーチなどのパンノニア史の研究者の議論も、主に碑文と考古資料に依拠している。本稿も同様の手法を用いて進めていく。

しかしながら、この手法は単に出土資料を列挙しているのではない。出土資料の客観性（出土状況や年代）は厳密に留保しつつ、その資料をいかに解釈し、研究対象とする地域の歴史の中に位置づけていくかは、研究者個人の思索の特徴が表れる。また、碑文の読み方や

出土資料の年代決定が、新たな研究成果により変化することもあるし、最近の発掘によって従来の説が覆ることもある。本章では、なるべく新しい考古学研究の成果をもとに、本稿の扱っている主題である「サヴァ川・ドラヴァ川での先住者文化である河川輸送のローマ時代での変化」をより顕在化できるように努めたい。

本章で主に依拠する研究書は、ローマ時代の商人が建立したり、言及されたりする碑文を網羅した Wim Broekaert 著の *Navicularii et Negotiantes: A prosopographical study of Roman merchants and shippers*⁹³⁾ と、現クロアチア領内にあるローマ時代の集落遺構の発掘報告書である K. J. Vučković 編の *Roman Village in the Province of Upper Pannonia: Virovitika Kiškorija South*⁹⁴⁾ である。前者からはサヴァ川とドラヴァ川で活躍した商人や水運関係者たちの存在が浮かびあがってくるし、後者からはサヴァ川流域とドラヴァ川流域を結ぶ街道沿いの集落の居住者が、先住者の生活様式を堅持したまま、ローマの支配を巧みに利用して生活していた様子が推察される。これらの著書が挙げる史資料、およびその他の資料を考察することで、サヴァ川・ドラヴァ川流域住民の当時の生活の実相を総合的に明らかにすることを試みたい。

IV-2 輸送

A 物資

セウェルス朝期、前章で見たようにパンノニアが繁栄していたならば、水路や陸路による物資の輸送も活性化したであろう。輸送された物資を列挙すると、だいたい次のようなものになるのではないかな。

軍団向けとしては、木材・食料・飼料・武器・工具・建築用資材（大理石他の石材・モザイク・煉瓦など）・衣服・陶器・装飾品・工芸品・燃料などが考えられる。軍団の兵士のための物資が主であるが、軍団駐留地付随の軍隊のために仕事をする一般人の居住地（カナバエ）では軍団のための武器・工具の製造と加工、煉瓦など建築資材・衣服・陶器・装飾品・工芸品などを製造したので、材料を搬入し、また余剰の製品は他の地域へ搬出した⁹⁵⁾。

一般人居住地向けには、木材・食料・飼料・燃料（郊外のウィッラでは自給可の場合あり）、建築用資材、煉瓦・陶器（居住地内で自給可の場合あり）、衣服（居住地内で自給可の場合あり）、装飾品・工芸品（居住地内で自給可のものと、豪華なローマ市やギリシア方面からの輸入品）などがあったであろう。

その他に、鉱物資源・羊毛・皮革などの原材料を産地から加工する場所まで輸送し、製造された製品を消費地や港など交通要所まで輸送した。

このように様々な物資が生産され、地域内で消費されたり、余剰物資は他地域へ輸送されて販売されたりした。地元で生産・製造されない原材料や物品は、属州内の他地域あるいは他の属州から輸入された。ローマ帝国が北はブリタニアから南はエジプトまでをひとつの政治的・法的統合体にした結果、個々の共同体間のマイクロ経済圏が、属州内の経済圏、さら

に属州間のマクロ経済圏をも視野に入れることが可能になったのである⁹⁶⁾。そういう状況では物資輸送はかなりの活況を呈したと考えられる。

属州間の輸送の例として、ローマ帝国西部の商人と運送関係者に関する碑文を網羅した著書の執筆者 Broekaert が紹介する、ブリゲティオ（現ハンガリーのコマーロム Komárom）で出土した、亡き妻のために naucerus（船主）である夫が建立した墓碑が挙げられる⁹⁷⁾。碑文の読みについては諸説あるが、Broekaert に従えば、夫の居住地とされている Pons Aeni（現 Pfaffenhofen-am-Donau）はイン川に面し、パンノニアのブリゲティオとは、ドナウ川とイン川で結ばれる。夫は Augusta Vindelicorum（現アウグスブルク近郊）で生産されたテッラ・シガラタ（赤みを帯びた高級陶器）を、この二つの川を航行してブリゲティオに運び、同地に住む妻や家族がパンノニア内での配送を受け持っていた⁹⁸⁾。

B 物資輸送に携わった人々

では物資の輸送はどのような人々が担ったのだろうか。陸路・水路の輸送は商人 negotiator が商取引全般を扱い、輸送も業務の一環として行った。しかし実際には陸路では荷馬車の御者やロバ曳き⁹⁹⁾ など、水路では船頭・漕ぎ手など多数の人々が関わった。

軍団向け物資輸送は主に兵士・軍属が担った。軍団駐留地には軍務以外の仕事をする兵士も存在しており、物資調達を担当していた。また軍団外との商取引に一般人が従事した可能性も考えられるだろう。蛮族との交易でも、一般人・兵役免除の兵士・退役兵士の商人がともに携わっていた可能性がある¹⁰⁰⁾。しかしある規模の物資集積地までは一般人だけで輸送し、そこで軍団向けの物資を分けて軍団の輸送担当者に託したことも考えられるのではないか。

一般居住地向け物資輸送は当然一般人が担ったが、現地人だけでなくローマ帝国各地からの移民やシリア・アフリカ出身の外国人も含まれていたことが、碑文などから確認されている。イタリア在住の元老院議員や騎士階級の人や商人の解放奴隷または奴隷が、パンノニアで彼らの代理として商取引に携わっていた事例も多い¹⁰¹⁾。

C 河川輸送に関わる多くの人々

輸送手段としては陸路のみの場合、水路のみの場合、陸路と水路を組み合わせた場合があるが、本稿では河川輸送のみを扱うので、それに関係する人々についてのみ取り上げる。それでも下に列举したように、実際に舟を動かす人々だけでなく、多様な仕事をこなす人々が必要とされたと推測できる¹⁰²⁾。

- ・ 舟の建造、メンテナンスに関わる船大工、職人
- ・ 船頭、漕ぎ手などの乗組員
- ・ 船着き場の管理、維持を受け持つ人間
- ・ 荷役作業員・倉庫の管理、維持を受け持つ人間
- ・ 河川の護岸設備などの維持、管理、補修を受け持つ人間
- ・ 舟の曳き手（川を遡る場合や川の水量が低い場合）

- ・以上の仕事に必要な道具や用具の製造・販売する人間、その材料や製品の運搬人
- ・船着き場周辺の飲食店の従業員など
- ・商人（輸送全体に関わる）・仲買人（物資を実際に調達）
- ・税関吏、橋や渡し場の管理者など

さて、これら舟運に関わる人々は、大まかな分類による職種別団体を構成しており、その代表者名が記された碑文が遺されている。その職種は *nauta*（漕ぎ手・船員・船主など舟運に関係ある人の総称）、*navicularius*（小舟の持ち主・船頭）、*gubernator*（船頭）などである。そのような碑文の一例として、ドナウ川とサヴァ川の合流地点シンギドゥヌム近郊から出土した *nauta* の団体の最高位である人物が、ネプトゥヌス神殿を修復したことを記したものが挙げられる¹⁰³⁾。川の合流地点の都市は水運ネットワークの結節点で、その都市の *nauta* の団体は、周辺地域の舟運関係者を束ねていたのかもしれない。

またエモナからは *navicularius* のコレギウム関係者の碑文が出土している¹⁰⁴⁾。同地近郊では、商人と見られる人物が *gubernator* の集団とともに建立した奉納碑文も存在する¹⁰⁵⁾。この地はサヴァ川とその支流ソポタ川（森林資源と鉱物資源の豊富なディナル・アルプス山脈から流れ出る）の合流地点である。彼は複数の舟を所有しており、船頭たちは彼の代理人として活動していたかもしれないと Broekaert は推測している¹⁰⁶⁾。川が商人たちの生業にとって重要な存在であるとともに安全を祈願する対象であったことを示す碑文も、サヴァ川沿岸のネウィオドゥヌムで発見されており¹⁰⁷⁾、橋と渡し場の守護神 *Neptunus Oivianus* に、商人の現地代理人である奴隷または息子が奉納したとみられる¹⁰⁸⁾。

以上から、経済活動の活況とそれに伴う雇用の増大がセウエルス朝期にあったと考えられる。雇用された人々は先住者だけでなく、帝国各地からの移民とその子孫も含まれていただろう。職域を共有することにより、彼らは人種・民族・出身地を超えてローマ帝国民であるとともに、「パンノニア属州民」というアイデンティティーを持つようになったのかもしれない。

IV-3 石材と木材の輸送

パンノニアの繁栄期には多様な物資が川を使って各地へ運ばれたであろうことを、前章で検討した。その中でも石材と木材は特殊である。まずそれらは重量があるため、陸路のみでは膨大な数の荷車とそれをけん引する牛やロバが多数必要となり¹⁰⁹⁾、非効率であるためやはり水路での運搬が多かったと考えられる。さらに石材と木材は、ローマ式の生活が浸透するほど需要が高まった資材であり、運搬量も増加したと思われる。以下では、ローマ支配下での河川輸送で特徴的となる石材と木材について述べる。

A 石材の輸送

ローマ化の象徴は石造建築物と石碑である。パンノニアの先住者は建物の基礎部分は石材を使うこともあったが、それ以外は木材やワラを使用していた。建築物全体あるいは多くの

部分を石材で建てることは、ローマ文化からもたらされたものであった¹¹⁰⁾。また石材に碑文を刻んで建立する慣習や、石棺を使用した埋葬習慣もローマ化の結果始まったものである。従ってパンノニアにおける石材の大量輸送はローマ支配下で初めて行われたものと言ってよい。セウェルス朝期の繁栄で、石造建築物や石像・石碑や墓碑の建立が増加したことは前述したが、それは同時に石材運搬の増加を意味した¹¹¹⁾。

石材は山間部の石切り場で、石柱や石碑や石棺のおおまかな形に切り出されてから、需要のある都市へ輸送され、そこで印刻や細かな浅浮彫装飾などが施される。例えばローマ建築や装飾で多用される大理石は、アルプス山脈中の属州ノリクムの石切り場からポエトヴィオなどの都市へ輸送された。重量のある石材の運搬には、複数の河川と陸路を使用した可能性が指摘される¹¹²⁾。

B 木材の輸送

木材は太古から多様な利用法があり、非常に重要な素材であるので、大プリニウスも『博物誌』の中で詳細に述べている¹¹³⁾。その記述を参考にしながら、以下にその利用法を列挙してみるが、ローマ文化の影響でその用途が広がったことが考えられる。

まず住宅建材としての木材であるが、パンノニアの先住民の伝統的住宅は、木造建築だった。ローマ文化が入り、石造建築物（神殿・公共建築物・大型住居）を建てるようになるが、土台や柱以外は木材を使用することがあった。特に梁・屋根や床は木造が多い。

造船用にも木材が必要である。ローマ軍団がドナウ沿岸に駐留するようになると、軍団用の監視船や、兵員や物資を水上輸送するための船舶（竜骨や舳がある）の製造が必須となった。一般河川での輸送用の平底舟・丸木舟・いかだの製造も、交易が活発化すると増加した。

木炭・薪などの燃料は、先住者の住宅の暖房用や従来の暖炉やかまどでも使用されていた。ローマ文化が導入されると、ローマ式床暖房、公共浴場、パン焼きやレンガ製造といった新たな需要が生じた。また陶器製造や鉄や銅の製錬も増加したので、それらの窯用燃料として大量に使用されたと思われる。

木材は、道路や石材運搬用傾斜路の建設資材としても用いられることから、ローマ統治下のインフラ整備に必要不可欠の素材である。その他、木像用、槍や楯用、農具の柄用といった木材の利用があげられる。

以上のようにパンノニアの繁栄を下支えしたのは、すべての産業と生活の基礎となる木材であるといっても過言ではなかろう。しかし、その輸送については史料・資料がほとんどない。恐らく中世から現代まで行われているように、山間部で伐採した木を河川に流したり（「管流し」、いかだに組んで他の物資や船客も運搬したり、傾斜路でふもとまで落とした後、目的地に合わせて河川輸送か陸上輸送されたりしたのであろう¹¹⁴⁾。

サヴァ川・ドラヴァ川流域周辺は、アルプス山脈とディナル・アルプス山脈、サヴァ川とドラヴァ川との間の丘陵地帯があり、木材資源は豊富であった。ローマ以前から長らく行われ

てきた木材輸送は、ローマ化でさらに需要が増した。特にセウエルス朝期の繁栄は木材の運搬も活性化させていたと考えられる。

木材を扱う商人を表す肩書は、碑文で *negoti/ans ma[t]lerarius*¹¹⁵⁾ や、*nego/tiato(ri)/lig(nario)*¹¹⁶⁾ などと記されるが、サヴァ川沿岸では木材運搬人のコレギアが存在したことを示す碑文が発見されている。「木材運搬人」は *dendroforus* = *dendrophorus* と表され、これはギリシア語 *δενδροφόρος* に由来している。エモナ出土の碑文 (*CIL* III, 10738 = *AIJ* 00127. 年代不詳) の建立者は、*dendrophorus* や、*centonarius* のコレギアのパトロンを務めた有力者である¹¹⁷⁾。またシスキアからは、*dendrophorus* のコレギアのメンバーが、若妻の死を悼んで建てた墓碑が出土している (*CIL* III, 10858. 年代不明)¹¹⁸⁾。*dendrophorus* のコレギアは流域の主要都市に存在したと考えられる。

以上、パンノニアの繁栄期における経済の活性化に伴い、増加したであろう輸送について考察した。河川輸送はこの時代、属州内の地域だけでなく、属州外の地域も視野に入れた活気に満ちた活動となっていたであろう。

しかし、これらは主に「ローマ化」した都市に関した需要と供給であった。それでは都市周辺の農村部ではどのような状況であっただろうか。繰り返し述べていることであるが、河川輸送だけでは内陸部へ到達できず、陸路との組み合わせが必要となってくる。またサヴァ川やドラヴァ川の沿岸都市のいくつかは、街道によって連結していた。そのため、サヴァ川やドラヴァ川から離れた場所に住む人々もまた、何らかのかたちで陸路による輸送に関与していることは、当然考察されるべきである。内陸部の状況を考察に含めることで、河川輸送を交通ネットワークという、より立体的な枠組みの中でとらえることが可能となるであろう。

次項では、サヴァ川とドラヴァ川の川谷に存在したいわゆる「ウィッラ」をキーワードに検討してみたい。

IV-4 ウィッラ遺構の再検証

A ウィッラ、ウィッラ・ルスティカ、ウィキ

ローマ文化を表す指標の一つとして属州に建設されたウィッラ (*villa*) を挙げることができよう。しかし、ウィッラという用語が指し示すものは何か。

ウィッラとは一般に元老院議員など富裕者が都市ローマ以外の土地に所有する別荘で、ローマでの政争や喧騒を避けて閑暇を楽しむために建てられた広大な土地を持つ大型住居である。元老院の同僚や皇帝の滞在も視野に入れるため、贅を尽くした造りとなっている。しかし、農業用の施設が付随していることも多く、その場合は農園とか荘園に相当すると言えよう。そこで生産される農作物は単に自邸で消費されるだけでなく、余剰生産物は近郊の都市で販売される。古代作家でも両者を明確に区別していないので¹¹⁹⁾、ある研究者は、ウィッラを定義することは困難であるという¹²⁰⁾。

そこで現クロアチア内のウィッラを研究しているレレコヴィッチとレンディッチ-ミオセヴィッチは、農業設備のない別荘と「明確な農業複合施設を構成する複数あるいは集合した家屋」がある地所を識別するために、後者にウィッラ・ルスティカ (villa rustica) という用語を当てる¹²¹⁾。大カトーやワッロは農業論についての著作で「ウィッラ」と表記しているが、実際に意味しているのはウィッラ・ルスティカである。

さて、パンノニアではウィッラ (ウィッラ・ルスティカ) の遺構が多数発見されていて、特に現在のハンガリー国内のものについては研究が進んでいる¹²²⁾。それらは石造の壁、漆喰細工、瓦屋根といったローマ建築の特徴を備え、床暖房やモザイク床・石造・壁画なども設置してある。

しかし本論で扱っているサヴァ川・ドラヴァ川流域は旧ユーゴスラヴィア領内にあたり、過去に調査されてはいるが、その発掘調査や報告が不完全であったり発掘調査が組織的でなかったりするので¹²³⁾、少数のウィッラが確認できただけであった。モーチは、パンノニアのウィッラはハンガリー国内のバラトン湖周辺とユーゴスラヴィア国内のサヴァ川とドラヴァ川間の地域に集中しているはずで、サヴァ川・ドラヴァ川間の地域でウィッラがほとんど発見されていないことがすなわち存在しないことではないと主張していた¹²⁴⁾。近年まさにこの地域のウィッラの研究の再検討がなされている¹²⁵⁾。

その過程でより明確になったことは、第一にウィッラやウィッラ・ルスティカは2～3世紀に建築されたものが多く、4世紀頃まで使用されたものもあったこと、第二に現ザグレブ近郊で発見された複数のウィッラ・ルスティカは、サヴァ川の渡河地点に近いことに加えてエモナとシスキアを結ぶ道に沿っている¹²⁶⁾ ことである。そして第三には、建設規模や建物の数が様々であるが、石造りかレンガ造りで壁画や床モザイクや床暖房を備えた居住部分と丸太造りの納屋や倉庫が存在することである¹²⁷⁾。

B ウィキと未分類の遺構

ところで最近の広範囲にわたる調査によって、従来のウィッラ・ルスティカにあてはまらないタイプの遺構も多数発見された。レレコヴィッチはこれらの遺構にまだ適切な用語が充たされていないので、仮にウィキ (vici) と呼ぶことを提唱している¹²⁸⁾。ウィキとは本来行政単位を示す用語で、例えば先住者の共同体を指す場合使用される。

レレコヴィッチがこの用語を新しく発見された遺構に使用する理由は、これがウィッラ・ルスティカとは二つの点で大きく異なるからである。それはまず、新しく発見された遺構が広大で、5～20ヘクタールを占める (ウィッラ・ルスティカは数百平方メートル) こと、そして、石造のローマ様式建築とは異なり、木材が主要な建材となっていることである¹²⁹⁾。

これらの遺構も2～4世紀に建造・使用されたものが多く、中にはゲルマン的建築法の建築物や、井戸の上に調理場がある先住者の住居の造りが見られるものもある¹³⁰⁾。建築構造体に木材を多用していても、レンガや屋根タイルを使用しているものもあり、多様性に富む¹³¹⁾。

またウィキともウィッラ・ルスティカとも分類できない遺構も発見されている。それらは崩壊したローマ様式の壁や陶器の破片、ローマ様式の墓や石碑が出土しているが、まだ研究が進んでいない。現在までに判明したことは、このタイプの遺構はシスキアとアンダウトニアの近郊に集中しており、エモナーシスキア間、ポエトウィオーシスキア間、シスキアーシルミウム間を結ぶ道路にも近いことである¹³²⁾。

C サヴァ川・ドラヴァ川流域のウィッラ・ルスティカやウィキと経済活動

前項で考察されたウィキの一つで、ドラヴァ川とドナウ川の合流地点ムルサに近い4ヘクタールに及ぶ地所では、セウエルス朝期から馬を飼育して、ドナウ沿岸に駐留する軍団に提供していたと考えられている¹³³⁾。

また、シスキア郊外のあるウィッラ・ルスティカと思われる動物の骨を伴う遺構の経済活動を探る研究によると、この遺構がもしウィッラ・ルスティカならば、農業生産施設が発掘されていない上、周辺の土地は沼沢地で穀物栽培に不向きである反面、都市シスキアに近接し、道路にも川にもアクセスできる好立地にある点から、牧畜業、特に牧羊を営んでいた可能性が考えられる。シスキアでは商品に付ける札 *tesserae* が大量に出土しており、刻印された文字からこの都市が毛織物の製造と取引に関係していると考えられているからだ。都市近郊で羊を飼い、羊毛を近くの川からサヴァ川へ運搬し、さらに水運・陸送で遠方まで運んだ可能性も否定できない¹³⁴⁾。

D 先住者の集落遺跡—Virovitica Kiškorija South の事例

一方「ローマ化」の影響を全く受けていない先住民共同体の遺構も発掘されている。以下では、そのような共同体が属州パンノニアでどのような位置を占めていたのか、発掘調査書をもとに検討してみたい。

2005年、現クロアチア北部ヴィロヴィティツァ・キシュコリヤ南（ヴィロヴィティツァの町の西入口付近）におけるバイパス建設工事に伴う緊急発掘が行われ、その結果8カ所でローマ時代（2～5世紀）と初期中世時代（8～10世紀）の、面積約1.7平方kmにわたる集落遺構¹³⁵⁾が発見された。

この場所はローマ時代には属州上部パンノニアに含まれており、当時は重要な交通路に面していた。すなわちビログラ山とドラヴァ川との間の平野部に位置しており、また「琥珀の道」のドラヴァ川渡河地点にある都市ポエトウィオと、ドラヴァ川とドナウ川の合流地点の都市ムルサを結ぶ道路も通っていた¹³⁶⁾。

属州パンノニアの現クロアチア部分に存在した集落の発掘は近年始まったばかりで、この遺構の発掘は大規模なものとしては最初であり、注目されるものである¹³⁷⁾。発掘の結果、木造家屋・貯蔵用或いは廃棄物用穴・溝・柵・炉・かまどが複数確認され、井戸も3カ所見つかった。作業用の構造物や半地下式家屋の跡も確認された。しかし、長期間同じ場所で改築や再建を繰り返している¹³⁸⁾ため層位が複雑であったり、上位層が完全に攪乱されていたり¹³⁹⁾で、特定が困難な場所が多い。また、土壌が強酸性で植物や動物の遺体が残存しにく

くサンプル数も少ない。また緊急発掘のため集落の全体像を完全に把握することは不可能であるが、限られた出土資料からこの場所に住んでいた人々の生活を考察すると次のような特徴が見られる。

まず住民の食性をみてみよう。半地下式家屋・穴・かまど・井戸・太い柱穴などから採取された植物遺体は、ほとんどが炭化状態、つまり熱を加えて調理されたものであったが、オオムギ・コムギ・雑穀などが確認された。その他にはソラマメや野生のベリー類、ごく少数のスモモが採取された¹⁴⁰⁾。また動物遺体の分析からはウシ・ヒツジ／ヤギ・ウマ科・ブタが同定された。

ローマ時代の食性は、クロアチアでの3カ所¹⁴¹⁾と、ハンガリーでの多数の場所の発掘成果から知ることができ、いずれも今回の分析結果とほぼ同様である。すなわち穀物（コムギ・オオムギ・キビ／アワなど雑穀類）とマメ類を栽培し、野生種の果物ブラックベリーなどを採集していた¹⁴²⁾。なかでもオオムギはローマ支配以前から先住者¹⁴³⁾によって栽培されており、粥・パンなど食用にしたり、ビールの原料になったり、家畜のえさにも利用された。パンノニア総督を務めた3世紀の歴史家カッシウス・ディオは、「パンノニア人はオオムギを食料にも飲料にも用いる、世界で最も惨めな人種だ」と記している¹⁴⁴⁾。

動物遺体のサンプル数はあまりにも少ないので、出土物から食性を論じることはできない。しかしローマ時代の文献や他地域での発掘から、ウシ・ヒツジ・ヤギは食肉用の他、採乳したり皮革や毛を利用したりしたものと考えられる。ブタは広く食用にされた。ウマ・ロバは荷役に使われた¹⁴⁵⁾。

次に土器・陶器・ガラス製品などの生活用具の特徴は以下のようなものである。発掘現場からはこの土地で作られた質素な土器だけでなく、少数ではあるがローマ式陶器（輸入ではなくパンノニア内で作られた模倣品）も出土しているが、この集落では土器はほとんど集落内で素人が製作したとみられる¹⁴⁶⁾。また機織に使用される陶製の錘も発見されている¹⁴⁷⁾。黒色ガラス製ビーズの腕輪は、成人女性用・子供用共多数出土した。本来はジェットという半貴石で作られ、魔力があるものとしてローマ帝国各地で流行していたものである。当地ではガラスビーズの模造品ではあるが、この集落の女性たちも流行の品をこぞって身につけていたと考えられる¹⁴⁸⁾。しかし、レンガや石材などローマの建築資材や、オイルランプやアンフォラといった生活用具は出土していない¹⁴⁹⁾。

以上簡単にこの集落の特徴を挙げてきたが、ローマの属州支配が定着してきた2世紀以降になっても、依然として先住者としての生活様式を守っていた様子が窺える。この先住者の伝統を保持しつつ、属州内共同体としてとして集落が成り立つ、という矛盾点と整合性をどのように説明すればよいのだろうか。

実はこの集落に近接したヴィロヴィティツァ・キシュコリヤ北の遺構は、ラテーヌ期から2世紀以前まで居住されていたケルト人の集落である¹⁵⁰⁾。北の遺構と南の遺構が同一の集落であったかは不明である。パンノニアではローマに反抗した共同体が、従来とは別の場所

に強制移住させられるケースがあった。しかしその場合、移住先はローマ街道からも地域の中心地からも遠い、辺鄙な場所であることが多い。ところがヴィロヴィティツァ・キシュコリヤの場合は、もし北と南の住民が同じであれば、街道から離れた北から、近い南へ移動したことになる。ローマのヒトや文化が頻繁に行きかう街道に面していても、この集落ではローマの生活様式はほとんど受容されなかった。

ローマの主要街道沿いでも、ローマの影響を受けていない集落は他にも存在する¹⁵¹⁾。発掘場所が限定的なので明確な結論を出すことはできないが、街道に面した場所に移転した理由の一つに、この集落の住民が街道沿いに住む利点を重視した、と推測できるのではないだろうか¹⁵²⁾。

この集落ではほぼ自給自足の伝統的生活を守ってきた。同時に少数ではあるが、集落の外部から持ち込まれたり、購入されたりした物品があった。例えば農具などに使用する鉄製品など集落内では生産できない用具や、先に挙げたガラスビーズ製の腕輪などである。ローマ支配以前からの生活様式を堅持していても、外の世界との接触はあったのである。

集落が面していたのはサヴァ川の河谷とドラヴァ川の河谷を結ぶ街道である。仮説として、住民の多くは街道の運搬を行ない、また荷駄獣の飼育をしていたと考えられないだろうか。ヴィロヴィティツァ・キシュコリヤ南の発掘現場では貨幣は少数しか出土していないが、その理由は貨幣経済が充分浸透していなかったというよりは、住民は物資を目的地の都市まで運搬して賃金を支払われると、そこの市場で生活必需品などに換えてから集落へ戻るため、集落にはほとんど貨幣が持ち帰られないからだったと考えられる。彼らは仕事として貨幣などローマ文化を理解し、便宜的手段として用いるが、生活としては先住者の伝統に安住していた。また支配者としてのローマも彼らにローマ式生活を強要していなかった。

このようにサヴァ川・ドラヴァ川流域では多様な形態の農業や畜産業が営まれており、特に2世紀頃からそれらに伴う施設（ウィッラ・ルスティカ）、あるいは共同体（ウィキ）、また集落の建設がさかんであったことが、考古学的に明らかになっている。この現象もやはりパンノニアの繁栄の一環として捉えることができないであろうか。流域住民は生産でも輸送でも雇用の機会が増加したであろう。また有力者は経済力を蓄えることができたと思われる。3世紀半ばからこの流域出身の皇帝が続くが、その背景には軍団の支持とともに、流域民の経済力とそれに伴う発言力があると考えられる。サヴァ川・ドラヴァ川流域は経済的に衰退しはじめていたというモチの考察とは、いささか異なった様相が見えてくるのではないか。

おわりに

M・フィンレーは、古代経済を考察する上で最大の問題は数値化できないことであると主張した¹⁵³⁾。本稿ではローマ帝国属州パンノニアのサヴァ川・ドラヴァ川でのセウェルス朝

期の河川輸送とその経済的実態を明らかにしようとしたが、資料の不在からやはり数値化することは不可能であった。それでも考古資料や碑文史料などから、両川で行われていた河川輸送がこの時期、かなり活況を呈していたことを明らかにできたと考える。

サヴァ川・ドラヴァ川流域の河川輸送は、ローマがこの地域に進出するはるか以前からの先住者固有の文化として、「琥珀の道」などの陸路と組み合わせさせた交易ネットワークを構成していた。ローマ帝国の支配を受けるようになってからも、そのネットワークは重要性を認識されて存続したが、ローマ以前のそれと最も大きく変化したことは、ローマの一元的支配によって、かなり遠方の属州外地域へ輸送される物品が増えたことではないだろうか。それまでケルト人など部族の居住地が河川沿いに散在し、居住地域ごとに関税がかけられていた可能性がある¹⁵⁴⁾、物品は地域内輸送に限られるか、地域外へ輸送するにはある川港から以遠は、別の集団が輸送を担当したと思われる。その場合流域民の経済活動は地域内で限定的であったが、ローマが関税を一括するようになると、ある集団が物品を運搬する距離は以前より伸びたであろう。

前章までで確認したように、セウエルス朝期のサヴァ川・ドラヴァ川流域では、パンノニアの属州民はもちろん、帝国各地から商人としてやってきた多様な人々が活動していた。そして陸運・水運を担う人々も集団（コレギア）を形成していた。彼らの中には碑文というメディアで、自分の存在を主張するものもいた。碑文に名前が刻まれた人物は、碑文を建立できる財力を持ったエリート層の一員であった。けれども、コレギアの一員であるということは、その背後には、彼が商人であれば彼と協働する商人仲間や彼の指揮下で働く人々が、また集団の代表であればその集団の他の成員が存在しているのだ。碑文は、いわばレンブラントが描く《夜警》の集団肖像画のように、光が当たった中心人物（碑文に名前が記されている人）と、背後の陰の中に立つ名前のわからない多くの人々とから構成されている集団を暗示するものといえよう。

また、ウィツラ、ウィツラ・ルスティカ、ウィキや集落で商品としての農産物・畜産物、その他織物などを作る仕事や、川港・街道筋などでの荷役などの仕事に従事した人々の存在も、表面的には見えないが、確かに存在したのである。

このように、サヴァ川・ドラヴァ川の流域民は、碑文に名前や業績が記された一部エリートも、個々の無名の一般人も、河川輸送という強力な地の利を生かして、属州の繁栄に寄与し、またその恩恵を受けとっていたと思われる。

本稿で考察してきたように、セウエルス朝期にサヴァ川・ドラヴァ川では経済的に発展していたと考えられる。その中で、経済力をつけた流域都市のエリートや農村部の属州民が発言力を高めていった可能性はないのであろうか¹⁵⁵⁾。デキウス帝（在位 249～251 年）から始まる「イリュリア人皇帝」たちは、ほとんどがサヴァ川とドナウ川が合流する地点に近いシルミウムやその周辺地域の出身である。彼らの支持母体はパンノニア出身の兵で構成されていた軍団であると考えられているが、上記のような経済力のある人々が彼らの登位に何ら

かの影響を及ぼさなかったか。「イリュリア人皇帝」の中には、サヴァ川流域の開発を手がけようとする者もいた¹⁵⁶⁾。このような経済的事業は、この流域の地元有力者が提案したり、助言したりしたのではないだろうか。そうだとすれば、サヴァ川・ドラヴァ川の河川輸送による経済効果は、帝国の支配体制に関与できるまでに大きくなっていった可能性もある。

ローマ帝国末期にドナウ河の防衛線が破られ、「蛮族」が帝国内に侵入・移住してくると、「蛮族」との境界はドラヴァ川になった。その頃、シルミウムやシンギドゥスムなどサヴァ川下流の都市はますますその重要度を増して、皇帝の御座所が置かれたり、貨幣鑄造所が設置されたりしたのであるが、これらのことからサヴァ川・ドラヴァ川が存在はパンノニア史の中で決して軽視できないものであることが看取されよう。

このように地域内活動に留まらなかったローマ時代のサヴァ川・ドラヴァ川の河川輸送であるが、ローマ帝国が崩壊した後は再びローマ以前のように分断された輸送に戻ってしまった。両川の流域は続々と到来する様々な民族の支配下になって、独立の経済圏を作り、その支配もめまぐるしく入れ替わったからである¹⁵⁷⁾。

この地域の河川輸送は太古から連続して行われた。そしてローマの支配と経済的繁栄という変化を受けて、広範囲で多様な物品の輸送に関わったが、それはこの地域の現代までの長い歴史の中でも特異な現象といえるのではないだろうか。

註

※ 碑文の出典典拠略号は以下の通りである。

AE : *L'Année Épigraphique*, Paris, 1888-.

AIJ : *Antike Inschriften aus Jugoslawien I : Noricum und Pannonia superior*, Zagreb, 1938. (ND Amsterdam, 1970.)

CIL : *Corpus Inscriptionum Latinarum consilio et auctoritate Academiae Litterarum Borussiae editum* III, X, XIII, Berlin, 1863-.

ILJug : *Inscriptiones Latinae quae in Iugoslavia...repertae et editae sunt*, Ljubljana, 1963-1986.

RSK : *Die römischen Steininschriften aus Köln*, Köln, 1975.

- 1) ギボンズはゲルマン人について次のように述べている。「…タキトゥス時代のゲルマン人というのは、まだ文字の使用など知らなかったわけだが、もともと文字の使用ということこそ、知識も反省力も持ちえぬ未開蛮族と文明人とを区別する主要条件のはずである。(中略)これだけは確実にいえると思うが、なにかの記述手段が存在せぬかぎり、忠実な民族史などを伝えることは絶対に不可能であり、また抽象的学問の進歩も期待薄、いや日常有用の生活技術すら見るべき発達はとうてい望めなかったはずである。」ギボンズ、エドワード『ローマ帝国衰亡史第I巻』(中野好夫訳)、筑摩書房、1976年、250-251頁。
- 2) 例えばミレット Millett によるブリテン島の「ローマ化」の研究 (M. Millett, *The Romanization of Britain: An Essay in Archaeological Interpretation*, Cambridge, 1990.) など。「ローマ化」については以下の本稿の第1章 I-1B 参照。
- 3) 例えばオリヴァ Oliva の指摘 P. Oliva, *Pannonia and the Onset of Crisis in the Roman Empire*, translated into English by I. Urwin, Praha, 1962. pp.242-248. 参照。ローマ帝国の活発な経済活動を描いたロストフツェフも、「身体からの取り立て」や「輸送義務」などの徴発と強制労働が帝国民に重い負担を強いた、述べている。M. ロストフツェフ『ローマ帝国社会経済史』(坂口明訳)、東洋経済新報社、2001年、557-559頁。

- 4) 後2世紀の歴史家アッピアノスは、マケドニアやトラキア以北からドナウ川までの土地に住む人々をギリシア人は Ἰλλυριῶν と称していた (*Appian* X, 1) が、実際にはイリュリア系・ケルト系など多くの部族が混在していた (*Ibid.*, X, 4~5)、とも述べる。ローマ支配下ではドナウ川から黒海までの全地域をイリュリア税管区 Ἰλλυρικὸν τέλος とした (*Ibid.*, X, 1)。
- 5) パンノニアのケルト人の農業は、紀元前1世紀の出土品から確認されるが、実際はもっと早い時期から行われていたと考えられる。農業用具の技術革命(鉄製のカバを木製の鋤の先端にはめて、土をより深く耕せるようにする、など) も見られる。M. Szabó, *The Celtic Heritage in Hungary* (translated by Paul Aston), Budapest, 1971. pp.35-36. また牛・羊・豚・家禽の骨も、紀元前4世紀後半のハンガリー北部の墓から出土しているので、その頃すでに定住農業を営んでいたとされている。A. Uzsoki, 'Ménfőcsanak', in L. Horváth, M. Kelemen, A. Uzsoki, & É. Vadász, *Transdanubia 1* (Corpus of Celtic Finds in Hungary Vol. 1), Budapest, 1987. p.40.
- 6) ストラボンや大プリニウスの著作。本論の第II章II-2参照。
- 7) 例えばテッラ・シギッタは、ローマ支配の初期はイタリアから直接輸入されていたが、生産地がガリアやライン沿岸に移るとそれらの地方から輸入された。同時期パンノニア内でも似たような様式と模様を持つ食器が生産されるようになる。初めはイタリア人技術者の指導の下で製作されたが、徐々にパンノニアの陶工だけで作られるようになった。それらは大きさがイタリアのものと異なったり、模様が型押しであったりであったが、かなりの需要があったとみられている。J. Fitz, 'Economic Life', in A. Lengyel and G.T.B. Radan eds., *The Archaeology of Roman Pannonia*, Budapest, 1980, pp.328-329.
- 8) アウグストゥス帝が養子であるティベリウスを派遣してパンノニアを平定したことは、Caesar Augustus, *Res Gestae*, 30 及び、Suetonius, *Tiberius*, IX 1 参照。
- 9) A. Mócsy, *Pannonia and Upper Moesia: A History of the Middle Danube Provinces of the Roman Empire*, New York, 1974, pp.54-55.
- 10) 例えば C. R. Whittaker, *Frontiers of the Roman Empire: A Social and Economic Study*, Baltimore / London, 1994; W. G. Waateringe et. al. eds., *Roman Frontier Studies 1995*, 1997.; I. Piso, *An der Nordgrenze des römischen Reiches*, Stuttgart, 2005.
- 11) ローマによる属州のローマ化については、タキトゥスの『アグリコラ』に属州ブリタニアにおけるラテン語教育など、ローマ風生活習慣が広まったことが「奴隷化」を意味したとの記述がある。Tac. *Ag.* 21.
- 12) F. Haverfield, *The Romanization of Roman Britain*, Oxford, 1915, pp.10-13.
- 13) *Ibid.*, p.14.
- 14) 例えば M. Millett は前掲書で、エリート of the ローマ文化受容は非エリートとの差別化を図るためであり、それが「ローマ化」を促進したと述べ (p.212)、エリートの積極的関与を主張した。
- 15) L. Revell, *Roman Imperialism and Local Identities*, New York, 2010, p.54.
- 16) 例えば、ローマ経済については長らくロストフツェフが代表する発展的経済観とフィンレーを中心とする小規模・自己充足的経済観が対立していた。しかし最近では帝国全土を対象にするのではなく、ある地域での経済活動を考察する研究や、経済一般ではなくある特定の経済活動を考察する研究などがさかんにになっている。Harris のイタリアのポー川流域の河川輸送についての研究 W. V. Harris, 'Trade and the River Po: A Problem in the Economic History of the Roman Empire' in *Rome's Imperial Economy: Twelve Essays*, New York, 2011, pp.188-197. や、Holleran の各種小売業の研究 C. Holleran, *Shopping in Ancient Rome: The Retail Trade in the Late Republic and the Principate*, Oxford, 2012.、Russel の建築材料や墓碑・石碑などに使用される石材の輸送形態や、建築工程の研究 B. Russel, *The Economics of the Roman Stone Trade*, Oxford, 2013. などが挙げられる。
- 17) 例えば T. Whitmarsh ed., *Local Knowledge and Microidentities in the Imperial Greek World*, Cambridge, 2010. (特に T. Whitmarsh による論文 'Thinking local', pp.1-16 はローマ世界全体にもこの問題を敷衍している。著者はセウエルス朝の皇帝たちは地方性と超地方性を兼ね備えていたと結論づけている。)
- 18) Oliva, *op. cit.*, pp.242-248.

- 19) 本稿で扱うセウエルス朝期と重なる。
- 20) Oliva, *op. cit.*, p.10.
- 21) *Ibid.*, p.242-248.
- 22) *Ibid.*, p.312-318.
- 23) A. Mócsy, *op. cit.*, pp.239-240.
- 24) *Ibid.*, p.232.
- 25) *Ibid.*, p.231.
- 26) *Ibid.*, p.230.
- 27) *Ibid.*, p.234.
- 28) *Ibid.*, p.244.
- 29) Cassius Dio, XLIX, 36. 2-5.
- 30) Herodian, II, 9.11.
- 31) C. Velleius Paterculus, 110. 2, 5 ~ 6. 『ローマ世界の歴史』(西田卓生・高橋宏幸訳) 京都大学出版会、2012 年、188 頁。
- 32) T. Leleković, & A. Rendić-Miočević, 'Rural Settlements', in B. Migotti ed. *The Archaeology of Roman Southern Pannonia: The state of research and selected problems in the Croatian part of the Roman province of Pannonia*, BAR International Series 2393, Oxford, 2012. pp.279-311 によるサヴァ川・ドラヴァ川流域の居住地の研究や、V. Vulkelić, and E. K. Glazer, 'Siscian Villa at the site "Mrcinište": Example of an Economic Production Complex in a Roman Period Pannonian Suburb', *RADOVI—Zavod za hrvatsku povijest*, vol. 47, 2015, Zagreb, pp.567-580. のシスキアのウィッラの研究。本稿本論の第 IV 章で詳述する。
- 33) J. J. Wilkes, 'The Roman Danube: An Archaeological Survey', *JRS*, XCV, 2005. p 149.
- 34) ケルト人がそれぞれの居住地で関税をかけていた可能性もある。本論の第 II 章 II-4 参照。
- 35) A. Harding, '20 Trade and Exchange', in H. Fokkens & A. Harding eds. *The Oxford Handbook of The European Bronze Age*, Oxford, 2013. pp. 370-381.
- 36) R. van de Noort, '21 Seafaring and Riverine Navigation in the Bronze Age of Europe', in H. Fokkens & A. Harding eds., *Ibid.*, pp.390.
- 37) 佐々木健『『学説彙纂』における河川利用の保護—特示命令の射程に注目して—』『法史学研究会会報』第 12 号, 2008 年、29-49 頁。船舶航行可能な河川と支流の支配が、中世においても国家権力と結びついていたことは、神聖ローマ帝国のフリードリッヒ I 世が国王大権(レガリア)に河川の支配権を含めたことが表している。池上俊一『森と川—歴史を潤す自然の恵み—』、刀水書房、2010 年、47 頁参照。
- 38) B. Campbell, *Rivers and the Power of Ancient Rome*, Chapel Hill, 2012. pp.83-117.
- 39) キャンベルは、属州の河川はローマ人の公共の所有物と考えられていたので、属州でもローマ法が適用されたと言う (*Ibid.* p.86.)。しかし属州ですでにあった慣習法は全く破棄されていたとは考えにくい。それぞれの属州の実態に即した法律があった可能性は否定できないのではないかと。
- 40) ローマ時代に使用された船舶については、ケヴィン・グリーン『ローマ経済の考古学』(本村凌二監修、池口守・井上秀太郎訳)、平凡社、1999 年 36-70 頁に詳しい。ドナウ川とサヴァ川下流で使用された帝政後期の軍船については、F. Himmler, *Untersuchungen zur schiffisgestützten Grenzsicherung auf der spätantiken Donau* (3.-6. Jh. n.Chr.), BAR International Series 2197, Oxford, 2011. pp.99-137. 参照。
- 41) www.trajan-column.org/?page-id=107 (閲覧 2018 年 11 月 25 日)
- 42) Malmberg はローマ時代テベレ川での河川輸送に使われた舟の種類を、文献に記された舟の名前とローマ時代の川港の遺構から研究し、テベレ川河口のオスティアからと、ミルウィウス橋以北の上流域からの水運は、積荷の差異から舟の種類や曳き船用の道の有無で、様相が異なった、と述べる。S. Malmberg, "'Ships are Seen Gliding Swiftly along the Sacred Tiber": The River as an Artery of Urban Movement and Development', in I. Östenberg, S. Malmberg, and J. Bjørnebye eds. *The Moving City: Processions, Passages and Promenades in Ancient Rome*, London & New York, 2016. pp.187-201.

- 43) いかだの使用法についてはアダムス C. Adams, '11 Transport', in W. Scheidel ed., *The Cambridge Companion to The Roman Economy*, Cambridge, 2012. pp.218-240; A. A. Rusu, & O. ToDa, 'Archaeological evidence for historical navigation on the Mureş (Muros) river' in *Acta Archaeologica Academiae Scientiarum Hungaricae*, Tomus 65- 1, 2014. pp. 139-154、近代のいかだの使用については樋渡彩+法政大学陣内秀信研究室編『ヴェネツィアのテリトリー—水の都を支える流域の文化—』、鹿島出版会、2016年；ヨアヒム・ラートカウ『木材と文明』（山縣光晶訳）、築地書館、2013年の研究で言及されている。
- 44) 長谷川敬「ガリア・コマタとイタリア—二世紀、内陸ガリア商人・輸送業者の人的交流」、桜井万里子・師尾晶子編『古代地中海世界のダイナミズム—空間・ネットワーク・文化の交錯』、山川出版社、2010年、184-206頁。及び「帝政ローマ前期ガリアにおけるナウタ組合—ある河川水運業者組合のパトロース選任に見る人的紐帯—」、『史学雑誌』117-10、2008年、1-36頁。本論で扱うサヴァ川の船乗り組合については第IV章 IV-2B 参照。
- 45) 財団法人河川環境管理財団河川環境総合研究所、「ドナウ川とティサ川の河川管理」、『河川環境総合研究所資料 第17号』、2008年。（http://www.kasen.or.jp/Portals/0/pdf_kasen03/study026_17.pdf）（閲覧 2018年11月25日）
- 46) International Sava River Basin Commission (<https://www.savacommission.org/>)（閲覧 2018年11月25日）
- 47) SEE River: Sustainable Integrated Management of International River Corridors in SEE(South-East Europe) Countries (<http://www.see-river.net/>)（閲覧 2018年11月25日）
- 48) 帝政期のローマ商人に関する碑文を集大成した Bruekaert によると、商人を表すラテン語 negotiator と mercator はつぎのように区別できると言う。negotiator は、元来「非ローマ人居住地で利益を追求する事業に携わるイタリア人かローマ人で、一時的に外国に住む」という意味で、前1世紀頃から碑文で確認されるようになった。一方 mercator は前3世紀のプラウトゥスの劇の中で多用され、前2世紀頃から商人の団体が建立した碑文に現れるが、個人の墓碑に使われるのは後1世紀半ばで、それも2世紀末から3世紀初頭には使われなくなった職業名である。従って、本稿の扱うセウェルス朝期では、商人という肩書のほとんどが negotiator となる。W. Broekaert, *Navicularii et Negotiantes; A Prosopographical study of Roman merchants and shippers*, Pharos-Studien zur griechisch-römischen Antike; Bd. 28, Leidorf, 2013. negotiator, p.15; mercator, p.150.
- 49) *Ibid.*, pp.109-110. 中世のルーシの商人は、カルパチア山脈を越えて、ハンガリーを通り、ドナウ川を遡ってレーゲンスブルクに至る交易ルートを持っていたとされ、商品は蜜蝋、奴隷、馬、毛皮などであったという。栗生沢猛夫『『ロシア原初年代記』を読む—キエフ・ルーシとヨーロッパ、あるいは「ロシアとヨーロッパ」についての覚書』、成文社、2015年、28頁、206-207頁。ローマ時代、レーゲンスブルクはローマ軍団の駐留地であったから、同様のルートを使い、同様の商品が輸送されていたのではないだろうか。本論21頁に引用している4世紀のローマ世界の地誌 *Expositio Totius Mundi* でも、パンノニアから輸送される商品として、駄獣や奴隷が挙げられている。
- 50) ストラボン『ギリシア・ローマ世界地誌』（飯尾都人訳）、龍溪書舎、1994年、552頁。
- 51) 例えば現在フランスのディジョン（古代名 Castrum Divionense）は付近にソーヌ川とセーヌ川が流れており、また山越えをすればライン川に至る場所であるが、当地から出土した nauta（舟運に関係する人）が建立した碑文（CIL XIII, 5489. 100～250年）には、荷車の上で袋を担ぐ男や荷車に馬具で繋がれている二頭の馬の浅浮彫がほどこしてある。nauta は舟運のみならず陸運にも関係しており、航行できる川と川の間では陸送していたことが見て取れる。Broekaert, *op.cit.*, pp.200-201.
- 52) Adams は「港は海運・水運・陸運の結節点として機能した。」と述べ（Adams, *op.cit.*, p.228）、これら三種の輸送手段が一体化したシステム（integrated system）であったことを強調する。Adams はローマ人がこのような輸送システムを認識していた証左として、小プリニウスがトラヤヌス帝に宛てて湖と港を結ぶ運河の建設を進言した書簡（Plin., *Ep. Tra.*, X, 41）を挙げている（*Ibid.*, pp. 221-222）。この運河建設の進言についてはケヴィン・グリーン『ローマ経済の考古学』（本村凌二監修、池口守・井上秀太郎訳）、平凡社、1999年。）71-72頁でも言及している。一方 Harris は、註16で

挙げたポー川での水運の研究で、それが地中海へと繋がる広域的な交易を目的とするものではなかったため、経済的には停滞傾向にあったと述べる。(Harris, *op. cit.*, p.193 など。)しかし河川輸送とはもともと短い間隔で設置してある川港を結ぶ短距離輸送であって、それが繋がることで長距離輸送になり、河口の海港へ物品が運ばれば、そこから海上輸送でさらに遠い場所まで輸送することができる。ハリスは輸送のネットワークを視野に入れていないように思える。

- 53) Plin., *N.H.* XXXVII, 12-13. 同書 XXXVII, 13 には、琥珀が北海沿岸でゲルマン人によって採取され、パンノニアに運ばれ、そこからイタリアへもたらされること、またパンノニアのカルヌントゥムからゲルマニアの海岸までは、約 600 マイルの距離であることが記されている。琥珀を表すラテン語は *electrum* であるが、ゲルマニア語では *glaesum* と呼ばれていることも紹介している。
- 54) 現ハンガリーの北部にあるジュール（ドナウ川沿い）近郊から出土した、ラテーン B 様式の女性の墓（紀元前 3 世紀頃）からは、北海産の琥珀のビーズのほかに、産地が不明なガラスビーズやサングのビーズが出土している。Uzsoki, *op. cit.*, pp.34-35.
- 55) S. Dušnić, 'Aspect of Roman Mining in Noricum, Pannonia, Dalmatia and Moesia Superior', in hrsg. H. von Tempolini und W. Haase, *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt* (Geschichte und Kultur Roms im Spiegel der neuern Forschung II), Berlin and New York, 1977. pp.52-94. Dušnić はパンノニア内よりも近隣諸属州内の鉱山の方が碑文などから場所を特定しやすく、またパンノニアとダルマティアとの間に横たわるディナル・アルプス山脈にある鉱山は鉄・銅・鉛が豊富であると述べている。これらの鉱山の位置は属州の境界に近く、ダルマティア内であっても、急峻なディナル・アルプス山脈を越えてアドリア海沿岸の港まで運ぶよりも、パンノニア側の河谷へ降りて、サヴァ川へ運んだ方が運搬の効率はよかったのではないか。後にサヴァ川との合流地点に近いドナウ川沿いの都市シルミウムに貨幣鑄造所ができたのも、金属材料の産地とサヴァ川で結ぶことができたのが一因であった可能性が考えられる。
- 56) ポンペイウス・トログスは次のように記している（下線部引用者）
 「…噂によればヒストリア族（訳者による註：イタリア東北部に住む、イリュリア系の一種族）はその起源をコルクス人―彼らは王アイエテスによってその娘の略奪者アルゴナウタイの追跡のため送られた―から引いていた。彼らがポントゥスから来てヒステル川（引用者註：ドナウ川）に侵入し、アルゴナウタイの跡を追ってサウエの川床を奥地へと進み、彼らの舟を肩に乗せて、山並みの峠を通過してアドリア海の岸へと渡った時、彼らは、先にアルゴナウタイも船（ママ）の大きさの故に同じことをしたのを知った。」
 Pomp. Trog., XXXII, 3『地中海世界史』（合阪學訊）、京都大学出版会、1998 年、372 頁。
 また Plin., *N.H.*, III, 127 にもアルゴ船についての言及がある。
- 57) Mócsy, *op. cit.*, pp.54-55.
- 58) 自身がケルト人であったポンペイウス・トログスは、つぎのように述べている。（下線部引用者）
 「…ガリア人（引用者註：ケルト人）は、人口が多くなって、彼らの生まれた土地が彼らを受容することが出来なくなった時、新しい居住地を求めに 30 万人を「神聖なる春」として派遣した。これらのうち一部はイタリアに定住し、またローマ市を占領して焼放った（ママ）。他の一部は鳥を案内人として（鳥占いの術では、ガリア人は他の者たちより熟達していた）、蛮族を倒しつつ、イリュリア湾を通り抜けて、パンノニアに定住した。」Pomp. Trog., *Ibid.*, XXIV, 4（合阪學訊）、前掲書、311-312 頁。
- 59) Oliva, *op. cit.*, pp.155-157., Mócsy, *op. cit.*, pp.28-30.
- 60) Polybios, IV, 46 : 1-4 と Pomp. Trog., XXIV, 4 は、ともにガリア人＝ケルト人が現金に執着している様子を、侵入した土地で武力行使をされたくなければカネを出すよう要求した、と記している。
- 61) 『カエサル戦記集 ガリア戦記』（高橋宏幸訳）、岩波書店、2015 年、81 頁。
- 62) Mócsy, *op. cit.* pp.112-113; Vukelić, Vlatka and Glazer, Eva Katarina, *op. cit.*, p.568, note 3.
- 63) K. Póczy, 'Pannonian cities', in A. Lengyel, & G. T. B. Radan, eds., *The Archaeology of Roman Pannonia*, Budapest, 1980. p.260.
- 64) Mócsy, *op. cit.* p.136.
- 65) Póczy, *op. cit.*, p.262.

- 66) Mócsy, *op. cit.*, p.136.
- 67) Póczy, *op. cit.*, p.255.
- 68) Mócsy は挙げているが (Mócsy, *op. cit.*, p.51)、Póczy はこれについて言及せず。
- 69) Cassius Dio, XLIX, 37 によると、ティベリウスは近くの同盟者から舟を調達し、それを曳行してドナウ川からサヴァ川に入り、さらに市を取り囲む川へと進み、そこで兵士と舟 (ναῦσι) で先住民に攻撃をかけ、海戦もどき (καὶ ναυμαχίας) の戦いをした。一方先住民は一本の丸太から作った舟 (μονόξλα πλοῖα)を用意して、それを使って攻撃した。
- 70) Póczy, *op. cit.*, p.268.
- 71) Mócsy, *op. cit.*, p.219.
- 72) Leleković & Rendić-Miočević, *op. cit.*, p.303.
- 73) Póczy, *op. cit.*, p.267.
- 74) *Ibid.*, p.263.
- 75) Mócsy, *op. cit.*, p.118.
- 76) Póczy, *op. cit.*, p.262.
- 77) *Ibid.*, p.259.
- 78) シルミウムとポエトウィオに税関が設置されていたことは確実であるし、またパンノニアは「イリュリア税関区」に含まれていた (Oliva, *op. cit.*, pp.235-236.) が、実際にどの商品にどのような税率がかかっていたか、或いは属州に入る時間税がかかるのか、出る時にかかるのかなどの詳細は不明である。C. van Tilburg, *Traffic and Congestion in the Roman Empire*, London and New York, 2007. pp.86-89 は多様な例を挙げている。
- 79) ローマ化とエリートについては本論の第1章1-1B 参照。
- 80) Boatwright はパンノニアの墓碑研究の中で、ローマの退役兵と先住者の妻と子どもたちの墓の浅浮彫では、女性が先住者の服装をしていること、墓碑建立以前に亡くなった子どもも像で表されること、母親が授乳をする姿や子どもの身体に手を回すことなど、パンノニアに特徴的な要素が確認できると述べている。M. T. Boatwright, 'Children and Parents on the Tombstones of Pannonia', in M. George ed., *The Roman Family in the Empire: Rome, Italy, and Beyond*, Oxford, 2005.
- 81) SHA, 'Valeriani Duo' 5 に 'duobus Deciis consulibus' と、デキウス父子が元老院議員であったことが記されている。他の属州出身の元老院議員は多く、その中から皇帝になった者も例えばトラヤヌス (ヒスパニア出身)、セプティミウス・セウェルス (アフリカ出身) など多数である。
- 82) パンノニアの騎士階級が一時は帝国内で活躍したことは、Mócsy, *op. cit.*, p.145.
- 83) シルミウム出身の皇帝たちを、この都市が後世「イリュリウム」と呼ばれる地域にあったので、「イリュリア人皇帝」と呼ぶこともある。パンノニアにローマ支配以前から居住していた民族としての「イリュリア人」とは、必ずしも一致しない。井上文則『軍人皇帝時代の研究—ローマ帝国の変容—』、岩波書店、2008年、198-207頁。
- 84) タキトゥス『同時代史』(國原吉之助訳)、筑摩学芸文庫、2012年、205頁。
- 85) Deinde Pannonia regio, terra diues in omnibus, fructibus quoque et iumentis et negotiis, ex parte et mancipiis. Et semper habitatio imperatorum est. *Expositio Totus Mundi et Gentium*, LVII
- 86) 佐野光宜「二つの闘技場を持つ町—カルヌントゥムとアクインクム—」『西洋古代史研究』第10号、2010年、63-73頁参照。
- 87) O. T. Láng, 'Reconsidering the Aquincum Macellum: Analogies and Origins', *Acta Archaeologica Academiae Scientiarum Hungaricae*, Tomus LIV, Budapest, 2003. pp. 165-204. また Zsidi は従来マルコマンニ戦争で破壊されたと言われるアクインクムの建造物の多くは、木造建築部分が多かったので、単なる火災で損傷を受けたのではないかと主張している。P. Zsidi, 'Transformation of the Town Structure in the Civil Town of Aquincum During the Severi (A.D.193-235)', *Acta Archaeologica Academiae Scientiarum Hungaricae*, Tomus LIII, Budapest, 2002. pp. 131-148.
- 88) CIL III, 3346. 図像については J. Fitz, *The Great Age of Pannonia (A.D.193-284)*, translated by I. Varga, Budapest, 1982. Plate 1 参照。
- 89) *Ibid.*, p.12.

- 90) 例えば AE 2006, 01032 は、セプティミウス・セウェルス帝の命で、老朽化し破損していた街道や橋を総督のファビウス・キロノの費用で修復した、という内容で、Nevidunum（現ドウルノヴォ）で出土した。同様の内容で、実際の修復担当者名が異なる碑文は、エモナ南東にあるサヴァ川沿いの現プレジチュ（CIL III, 04624）や現モクリチュ（CIL III, 04623）など、パンノニア各地で出土している。またアレクサンデル・セウェルス帝時代の修復碑文も各地で出土している。
- 91) モーチは前掲書の時代区分の基準として、パンノニアの第一繁栄期をウェスパシアヌス帝治世頃からビウス帝治世頃まで、第二繁栄期をセウェルス朝期頃、第三繁栄期を 3 世紀末頃～4 世紀半ば頃と考えており、他の研究者もおおむね踏襲している。
- 92) パンノニア西部での雇用の創出については、本論の次章参照。また 3 世紀後半のプロブス帝の雇用対策については註 156 参照。
- 93) 詳細な書誌は註 48。
- 94) 詳細な書誌は註 135。
- 95) 軍団内やカナバエでの輸送・生産活動については C. R. Whittaker, *Rome and Its Frontiers; The Dynamics of Empire*, London and New York, 2004. の '5 Supplying the army; the evidence from the frontier fort of Vindolanda' (pp.83-114) 参照。
- 96) J. Paterson は、「地元に根ざしたマイクロ経済圏が、より広範な地域をマーケットの対象とするようになったのは、negotiatores が地元と広い市場の繋がりを構築し、維持する主たる要素となったからである。そして地元経済の性格も、外部地域の市場の影響を受けて、変質した場合もある」と述べている。J. Paterson, 'Trade and traders in the Roman world: scale, structure, and organisation' in H. Parkins and C. Smith eds. *Trade, Traders and the Ancient City*, London and New York, 1998. p.164.
- 97) AE 1999, 1246. 230～260 年。
- 98) Broekaert, *op. cit.*, pp.225-226.
- 99) Broekaert 前掲書 p.486 では、ケルト系の名前をローマ風にしたロバ曳き mulionius の墓碑が紹介されている（CIL III, 10557. 200～300 年。出土地アクインクム）。碑文の上部にケルト文化に特徴的な大きな車輪の浅浮彫装飾があるという。
- 100) Whittaker, *op. cit.*, p.92. また Tac. *Ann.* I, 35 では、後 14 年のゲルマニアにおける軍団の反乱の記述で、不満分子の兵士が述べ立てる過酷な労務についての苦情の中に「食糧・材木・薪の運搬」（『年代記』國原吉之助訳、岩波文庫、2006 年、p.49）が含まれている。
- 101) モーチはフラウィウス朝からトラヤヌス帝時代（パンノニアの第一繁栄期）に、軍団の需要を見込んでイタリア商人が「琥珀の道」沿いの都市に進出したことを報告している。Mócsy, *op. cit.* pp.119-122.
- 102) ロストフツェフ著『ローマ帝国社会経済史 上』（坂口明訳）東洋経済新報社、2001 年、233-234 頁では港の活況を表す浮彫とフレスコ画を詳しく紹介している。また 243 頁では、モーゼル地方で商業に携わった一族の墓碑に描かれた陸上輸送と河川輸送の様子を紹介する。港湾都市オステアの発掘から窺える港とその周辺の施設についてはマルコ・サンジョルジョ「河と海の間の港町オステア」（高久充訳）、坂口明・豊田浩志編『古代ローマの港町—オステア・アンティカ研究の最前線—』、勉誠出版、2017 年、21-32 頁参照。河川運輸に関係する職業については、池上俊一、前掲書、62-64 頁参照。古代の史料が皆無に等しいため、同書が扱う中世の事例から逆照射することも可能かと考える。
- 103) AE, 1905, 153. 200～300 年。
- 104) CIL III, 10771. 75～200 年。
[D (is)] M(anibusu) / [—]luli / [—]For]tunati llllv(iri)et / [—col]l(e)gi navicular(iorum) / [「神々の御手に。…二人委員を二回務めた Fortunatus と navicularius のコレギア（により？）…」]
Broekaert によると、これは イタリア・ガリア・アフリカ以外で navicularii の団体が記録されている唯一の例である。Fortunatus とこの collegium の関係は不明だが、パトロンであったかもしれない。Broekaert, *op. cit.*, p.233.
- 105) AE, 1938, 151. 年代不詳。

- 106) Broekaert, *op. cit.*, p.486.
 - 107) *CIL* III. 14354.22. 1 ~ 100 年。
 - 108) Broekaert, *op. cit.*, p111.
 - 109) Russel は古代の一般的な荷車では 1 ~ 2 トンを超える積荷に対応できないと述べる。それを超える石材は、コロのついたソリに載せて坂道を下った事例を挙げている。Russel, *The Economics of the Roman Stone Trade*, Oxford2013, p. 98. しかし古代では水の力をもっと利用されたのではない。大規模建造物を建てる時は、ミラノの大聖堂の建築時のように、石材や木材を建築現場のすぐ近くまで運搬できるように、運河を開削することがある。註 112 の Pochmarski の研究を参照。
 - 110) Mócsy, *op. cit.*, pp.169-176 参照。
 - 111) 属州下ゲルマニアの Colonia Agrippina (現ケルン) で、亡き妻と息子、さらに自身のための墓碑を建立した人物は、neg (otiator) artis lapidariae という肩書を使っている。*CIL* XII, 8352 (*ILS* 7538), 200 ~ 225 年の碑文。
 - 112) E. Pochmarski, 'Transport of Marble on Land or by River in SE-Noricum and Western Pannonia', Institute of Social Science, *Historia Antiqua*, 21/2011, Zagreb. 2011, pp.29-36. (www.hrcak.scri.hr/file/148654) (閲覧 2018 年 11 月 25 日)
 - 113) 大プリニウスは木の多様な使い道を記述している (Plin. *N.H.* XIV, 15.) が、輸送についての記述はない。
 - 114) 近世以降の木材輸送の形態については、樋渡彩+法政大学陣内秀信研究所編『ヴェネツィアのテリトリー—水の都を支える流域の文化—』の「3 筏流しと結びついた地域の役割」；ヨアヒム・ラートカウ『木材と文明』(山縣光晶訳)の「第 2 章 6 筏流しと菅流し—木材業の原動力としての水運—」に詳しい。両書の詳細な書誌は註 43。
 - 115) *CIL* III, 12924. 年代？ダルマティアの Salona 出土。後背地であるディナル・アルプス山脈の木材資源を、アドリア海の港からイタリアへ輸送したか。Broekaert, *op. cit.*, p.92.
 - 116) *RSK* 326. 100 ~ 200 年。下ゲルマニアの Colonia Agrippina から出土。ゲルマニアの森林地帯の豊富な木材資源を、ライン川を使って取引していたのだろう。Broekaert, *op. cit.*, p142.
 - 117) C(aius) Bassidius C(ai)f(ilius) Cl(audi) / Secundus aed(ilis) i(ure) d(icundo) / bis q(uaestor) p(ecunia) p(ublica) II vir i(ure) d(icundo) part(onus) / coll(egi) dendrof(orum!) / praefectus et / patronus coll(egi) / centonariorum / II vir i(ure) d(icundo) q(uin)q(uennalis)
 - 118) Aurel(iae) Veneriae ob hon(orem) / et flore(m) iuventu[tis] subit(a) / morte occupatae mi(hi) pient(issimae) / virgini P(ublius) Ael(ius) Iulianu[s] / ex num(ero) coleg(ii) dendro(phorum) v(ivus) f(ecit)
- 年代についてオリヴァはクツィンスキー Kuzsinsky が 1895 年の著書で 2 世紀末から 3 世紀初頭と設定していることを紹介している。Oliva, *op. cit.*, p.330.
- 119) 小プリニウスは書簡集 II, 17 で、ラウレントゥムの「villa 別荘」を詳細に紹介しているが、この別荘には自給自足のための生産施設すら設置されていないことがわかる。一方彼は別の書簡 (III 19) で他の場所の「地所」を購入する相談をしている。この地所は余剰生産物を販売して収入を得られるだけの農業生産設備が備わった地所であって、II, 17 の「別荘」とは明らかに性質が異なることがわかる。ところが彼はこの地所について、現在既に所有している「別荘」に隣接しているから、新しい「villa 別荘」の「家具調度の費用・家事係・装飾用園芸師…」(『プリニウス書簡集—ローマ帝国—貴紳の生活と信条—』(國原吉之助訳)、講談社学術文庫、2006 年、136 頁)についての費用が浮くと、書いている。本来ならば農業生産設備が備わっている地所の方の家屋も、豪勢に設えるべきものである。
 - 120) J. Percival, *The Roman Villa: An Historical Introduction*, Berkeley and Los Angeles, 1976. pp.13-15.
 - 121) Leleković, & Rendić-Miočević, *op. cit.*, p.287. (詳細な書誌は註 32) これはパンノニアのウィッラについてのモーチの定義の援用である。Mócsy, *op. cit.*, p.169
 - 122) Mócsy, *op. cit.*, pp.169-176. ; E. B.Thomas, 'Villa Settlement', in A. Lengyel and G. T. B. Radan eds., *The Archaeology of Roman Pannonia*, Budapest, 1980. pp.275-321.
 - 123) A. Rendić-Miočević, '2 Villae rusticae' in Leleković & Rendić-Miočević, *op. cit.*, pp.286-287.

- 124) Mócsy, *op. cit.*, p.169.
- 125) A. Rendić-Miočević, *op. cit.*, pp.286-287
- 126) 余剰生産物を販売するために、ウィッラが栄えた町や陸路・水路に近接している必要性を、大カトーもウァッロも説いている。Cato, *de Agri Cultura*, I, 3.; Var, *R.*, I, 16.
- 127) Rendić-Miočević, '2 Villae rusticae' in Leleković & Rendić-Miočević, *op. cit.*, pp.281-282.
- 128) T. Leleković, '3 Vici' in Leleković & Rendić-Miočević, *op. cit.*, p.291.
- 129) *Ibid.*, p.291.
- 130) 属州民はウィッラ建築で、単にイタリアの様式を踏襲するだけでなく、彼ら自身の様式を考案した、その結果属州各地でさまざまな形態のウィッラが発展した、とパーシヴァルは述べている。J. Percival, 'Houses in the Country', in I. M. Barton ed., *Roman Domestic Buildings*, Exeter, 1996. p. 83. (パーシヴァルは1976年の著作では、表題に villa を使っているが、1996年のこの論文では Houses in the Country を使っており、定義の不明確な villa の使用を避けているように見受けられる。)
- 131) T. Leleković, *op. cit.*, pp.291-301.
- 132) T. Leleković, '4 Unidentified rural settlements' in Leleković & Rendić-Miočević, *op. cit.*, pp.302-308.
- 133) T. Leleković, '3 Vici' in Leleković & Rendić-Miočević, *op. cit.*, p.300.
- 134) V. Vukelić, & E. K. Glazer, 'Siscian Villa at the site "Mrcinište": Example of an Economic Production Complex in a Roman Period Pannonian Suburb' in *Journal of the Institute of Croatian History*, Zagreb, vol. 47, 2015. pp.567-580. (<https://hrcak.srce.hr/file/226784>) (閲覧 2018年11月25日)
- 135) 面積は約1.7平方km K. J. Vučković, et. al., *Roman Village in the Province of Upper Pannonia: Virovitica Kiškorija South*, Monograph of the Institute of Archaeology, MIA 7, Zagreb, 2015. p.14. (www.researchgate.net/publication/273130060) (閲覧 2018年11月25日)
- 136) K. J. Vučković, '2.2 Location of the site and communication routs' in K. J. Vučković, et al., *op. cit.*, pp.22-23.
- 137) R. Šoštarić, S. Radović, K. J. Vučković, and I. O. Roguljić, 'Diet at the Roman Village of Virovitica Kiškorija South, in *Collegium Antropologicum* 39 (2015), p.829. (<https://hrcak.srce.hr/file/245503>) (閲覧 2018年11月25日)
- 138) 集落の北部は土地が低いので浸水しやすく、粘土質の土壤で住居に適さないが、南部は土地が少し高く、乾いた砂地であるため住居に適していたと考えられる。 *Ibid.*, p.830.
- 139) 近年この付近ではカモミールや小麦の栽培が盛んになり、地表は耕作された。 *Ibid.*, p.830.
- 140) *Ibid.*, pp.832-833.
- 141) Ilok (ローマ時代の地名 Cuccium) と Šćitarjevo (ローマ時代の地名 Andautonia) の墓群、Osijek (ローマ時代の地名 Mursa) の都市遺跡。 *Ibid.*, p.838.
- 142) *Ibid.*, p.838.
- 143) イリュリア人、ケルト人、ゲルマン系など。オオムギ・コムギ・雑穀については大プリニウスも *N. H.* XVIII で詳しく記述している。
- 144) Dio Cassius, XLIX, 36. 2-5.
- 145) R. Šoštarić, S. Radović, K. J. Vučković, and I. O. Roguljić, 'Diet at the Roman Village of Virovitica Kiškorija South', p.840.
- 146) K. J. Vučković, 'Introduction and pictorial glossary (of scientific vocabulary used in the chapter of ceramics)', in K. J. Vučković, et. al., *op. cit.*, p.127.
- 147) *Ibid.*, p.181.
- 148) K. J. Vučković, 'Glass jewellery and the catalogue', in K. J. Vučković, et. al., *op. cit.* p.243.
- 149) Vučković, 'The fabrics of ceramic dishes', in K. J. Vučković, et. al., *op. cit.* p.111.
- 150) K. J. Vučković, 'Virovitica Kiškorija South; an example of a Roman village in the Upper Pannonia', in K. J. Vučković, et. al., *op. cit.*, p.356.
- 151) *Ibid.*, p.356.

- 152) *Ibid.*, p.357.
- 153) フィンリーは古代の著作に数量や統計データが不足していることが、古代経済を研究する上で最大の難点だと主張する。M. I. Finley, *The Ancient Economy: Updated with a new foreword by Ian Morris*, Berkeley, Los Angeles & London, 1985. pp.23-26.
- 154) 本論の第II章 II-4 参照。
- 155) しかし、本論の第I章 I-1「問題の所在と先行研究」で挙げたように、パンノニア史研究者の Oliva と Mócsy は、富裕層と貧困層の経済格差を問題視している。また、ロストフツェフも、没落する都市エリートと、「所有者と労働者の間に立つ中間の人々」との分断が、経済的衰退の原因とする。ロストフツェフ、前掲書 380 頁。
- 156) プロブス帝（在位 276 ～ 282 年）は自身の出身地「…シルミウム近郊のアルマ山を兵士の手で耕作させ、品質の良いブドウの木を植えさせた。」シラクサのフラウィウス・ウォピスキス「プロブスの生涯」（井上文則訳）アエリウス・スパルティアヌス他『ローマ皇帝群像 4』、京都大学出版会、2014 年、184 頁。帝はまた「…シルミウムへ来た時、生まれ故郷の土地を富ませて、広げようと望み、ある沼地を干拓するために、巨大な排水路を作る計画を立てて、何千もの兵士を同時に投入した。プロブスは複数の開口部を通してサウス川へ流れ込むこの排水路によって、土地を干拓し、シルミウムの人の利益を図ったのである。」、（井上文則訳）同書、188-189 頁。しかし排水路の仕事をさせられた兵士によって暗殺された。
- 157) キタニチ・マーテーは 4 世紀にクロアチア人がサヴァ川・ドラヴァ川へ移住した結果、それまで川沿いに居住していた住民が山岳部に逃れた、と指摘する。「第二章 ハンガリーへのクロアチア人移民—16 世紀から 18 世紀」（秋山省吾訳）、山本明代、P. ノルベルト、『移動がつくる東中欧・バルカン史』、刀水書房、2017 年、53-83 頁。またショクチェヴィチ・デーネシュによるとハンガリー地域に居住したクロアチア人は、主に農業や牧畜などに従事していたが、ドラヴァ川沿いでは漁業や船舶業が重要となり、引き船の仕事に就く者もいた。「第五章 ハンガリーのクロアチア人エスニック集団の多様性と移住・統合過程」（山本明代訳）山本明代、P. ノルベルト、同書、150 頁。

謝辞：本稿を執筆するにあたり、上智大学名誉教授豊田浩志先生より、オリヴァの著書をはじめ貴重なパンノニア関連資料を多数ご提供いただきました。深く感謝申し上げます。

《English Summary》

The Dynamics of River Transport in Roman Pannonia:

The Economic Activities in the Save and Drave River Basin
under the Severan Dynasty

Yuriko NOZAKI

It would contribute to revealing how Rome ruled the provinces to investigate the cultures and traditions of the indigenous, which have not been fully examined in the study of the Roman provinces; did they transform under the Principate, or did they have any impact on Rome's control? This paper will discuss river transport on the Save and Drave rivers in western Pannonia. People in the river basins, who benefitted from the geographical conditions of the area, had long been engaged in trade and transportation. Since Rome recognized the economic importance of river transportation, it urbanized the area and intensified an integrated system, connecting land and river transport. This affected the life of the indigenous people through an increase of job opportunities and trade with a wider area.

Under the Severan emperors, owing to the relative stability on the border along the Danube, Pannonia is considered to have enjoyed prosperity, which would have stimulated transportation of commodities and inter-provincial trade, and activated river transport. Inscriptions and epitaphs excavated from the river basins attest the activity of people related to shipping. Also, the results of the excavation of an indigenous community which lay in the region between the two river basins present the possibility that the 'un-Romanized' inhabitants participated in some way in the network of transport. It is probable that a strengthened economic base was one of the causes which enthroned a series of emperors coming from the river basins.

Thus, the relationship between the indigenous people and Rome was interactive, not unilaterally Rome's influence on the indigenous.